

太平天国北伐軍の敗退と援軍の臨清攻撃

菊池 秀明

はじめに

近年の中国史研究における大きな変化は、新史料の発見によって歴史の具体像が明らかになった点であろう。とりわけ清朝政府の公文書である檔案史料の公開は、時代の要請に基づいた一面的な歴史認識の見直しを可能にした。太平天国運動（1850-64年）についても今こそ「革命の先駆者」あるいは「破壊者」といった従来の評価を超えて、客観的な立場からその実像を解明する必要が高まっている。

筆者は別稿において太平天国が行った北伐前期、中期（1853年5-12月）の歴史について検討した。北伐軍の兵力は2万人で、清軍の防衛力不足もあって順調に軍を進めたが、黄河の渡河後に2ヶ月にわたり懷慶攻略戦を行なって時間を浪費した¹⁾。9月に山西へ迂回ルートを取った北伐軍は直隸へ進出し、北進して深州を占領すると北京は驚惶状態に陥った。清朝が訥爾經額を解任して欽差大臣勝保に追撃を命じると、北伐軍は天津郊外の独流鎮、静海県に進出して援軍の到着を待った。しかし欽差参贊大臣として太平軍の迎撃を命じられた僧格林沁が北京を出発すると、その兵力を過大視した密偵の報告を受けた太平天国首脳部は援軍の派遣に慎重となった。北伐軍も籠城を続けることで北京攻略のチャンスを失い、有利だった戦局は変化し始めたことを指摘した²⁾。

本稿は北伐軍が南方への撤退を始めた1854年1月から、安慶から派遣された援軍が山東省臨清を陥落させながら敗北した同年5月までの歴史を検討する。北伐の戦局さらには太平天国そのものの運命を大きく左右したこの時期の歴史については、すでに簡又文氏³⁾、張守常氏⁴⁾、崔之清氏⁵⁾、堀田伊八郎氏⁶⁾らの研究がある。本稿はこれらの成果に学びながら、中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』⁷⁾、中国社会科学院近代史研究所編『太平軍北伐資料選編』⁸⁾ および中国第一歴史檔案館所蔵の軍機処奏摺録副・農民運動類のマイクロフィルムを用いて分析を進めたい。また援軍に呼応した捻子（後の捻軍）などの地方武装勢力に注目することで、北伐軍の進出に対する華北社会の反応を19世紀中葉の地域変容という視点から考察したい。それは太平天国の歴史を階級闘争史観から解き放ち、新たな中国近代史像を構築するための一階梯になると思われる。

1. 北伐軍の撤退と敗走

(a) 独流、静海戦後半の戦局と北伐軍の撤退開始

まずは北伐軍の独流鎮、静海県における戦いの後半部分を検討したい。1853年12月23日の敗戦で降格処分を受けた欽差大臣勝保は、27日から独流鎮の北伐軍陣地に攻勢をかけた⁹⁾。また彼は北伐軍陣地から北へ500メートル余りの杜家嘴に砲台を築き、1854年1月に入ると「連日賊壘にねらいを定めて轟撃し、砲弾が至るところに落下して壁を倒し、屋根を傾けた」¹⁰⁾とあるように砲撃を加えた。さらに北伐軍が独流鎮と静海県の2カ所に分かれていることに目をつけた勝保は、その中間地点で勝保の本営がある梁王荘から3キロほどの葡萄窪に「陣地を構築して賊の援助を断つ」計画を立てた。

このとき勝保麾下の清軍は2万数千人いたが、実際の戦闘に使える兵は四川、湖南、天津の壮勇を併せても5,000名に過ぎず、激しい反撃が予想される分断作戦に十分な兵力を確保出来なかった。そこで彼は陣地構築を進めながら、山東徳州の防衛を命じられた杭州將軍瑞昌と塩山県にいた山東布政使崇恩の兵2,000名を静海県へ呼び寄せることにした¹¹⁾。

次に北伐軍はどうであろうか。12月末に勝保が見つかった情報によると、独流鎮の陣地は「食糧が多くないことはわかるが、その実際の数は窺い知れない。賊衆は食事ごとに粥が二碗、あるいは麪餅が二枚で、一人当たり馬肉が大きな塊二つが与えられる。静海県の食糧はさらに少なく、時折賊が独流に来て駱駝で運んでいる」¹²⁾とあるように、籠城戦が続く中で食糧が不足し始めていた。また1月中旬に勝保は「賊の陣地では糧米がまさに尽き、近日静海県の倉庫に貯蔵された米や民家から掘り出した粟麦を研いで食べたが、湿気が多くて蒸しても咽喉を通らなかった。逆衆は益々焦り、今月中に必死になって天津を攻撃しないと生き延びられないと密かに話し合ったという」¹³⁾とあるように、新たに獲得した穀物が食用に堪えず、食糧不足が深刻となったため、北伐軍は天津を再攻撃する必要に迫られていると報じた。さらに勝保は次のように述べている。

逆匪が静海、独流を佔踞した時は、老賊と脅されて従った者は数万人を下らず、騎馬の賊目も約数千いた。私たちが攻撃してからは、大小の戦いが数十回……、屢々勝利して殺し、解散させた者はすでに十の六、七に及ぶ。賊の勢いは日に衰えており、二カ所の賊衆は一万を超えず、騎馬の賊も千に満たない。賊は心中では恐れ戸惑い、食糧は日に不足している。しかも直隸や山西などの省で脅されて従った者たちは、私が方法を講じて解散を勧めたところ、日に逃げ出す者が甚だ多い。湖広や江南の衆もこの苦境を逃れたいと願っているが、往往にして老賊に連れ戻され監禁された。みな心では恨み罵っており、内側から潰える勢いはまさに成ろうとしている。¹⁴⁾

この上奏を見る限り、北伐軍は騎兵を含めて数万人いた兵力の半分を失うほどの打撃を受け、解散の告示を見て脱走者が続出するなど崩壊の危機に瀕していた。これが事実であれ

ば、彼らの独流、静海からの撤退は敗走だったことになる。

だがこの頃の勝保は咸豊帝が「詞気は軽張で、漸く自満の意あり」¹⁵⁾と叱責したように、誇大な報告が目立つようになっていた。まず食糧について見ると、1月中旬に欽差参贊大臣僧格林沁は「最近逃げ出して捕らえられた者が言うには、賊の食糧は充足しており、なお数ヶ月の用に足りるとのことだった」¹⁶⁾と述べている。この頃清軍に捕らえられた王自發（江蘇南京人）も「現在糧米はなお一ヶ月の食用に足りる」¹⁷⁾と供述しており、必ずしも深刻な食糧不足に陥っていた訳ではなかった。

次に清軍の砲撃について、勝保は「砲台を築いてからは砲弾を打ち込んで、毎日逆匪を傷つけること百余人から数十人。老賊もまた震え上がらない者はなかった」¹⁸⁾と報じている。だが1月18日の戦闘で勝保が神威砲40門を連射させたところ、「施薬が多すぎた」¹⁹⁾ために3門が破裂して役に立たなくなった。すると北伐軍は遺棄された大砲を陣地内へ回収した²⁰⁾。これ以前にも彼らは戦場で「官兵の軍械」を多く奪っており、「槍砲は前よりも倍増し、これによって死守抗拒したため、官兵は如何ともすることができなかった」²¹⁾とあるように防禦力を強化した。

また両軍の戦闘で焦点になったのは砲台の建設をめぐる攻防であった。初め勝保は独流鎮南西にある王家宮に砲台を築くことが理想的と考えた²²⁾。だが実際は東へ2キロ以上離れた李家楼、余家鋪に「溝を掘って土塁を築き、砲台を建築」²³⁾せざるを得ず、それも独流鎮の太平軍部隊による激しい抵抗を受けた。この時清軍の補給を担当していた天津の塩商張錦文は、勝保の命令を受けて砲台建設を進めたところ、「賊は砲台が建造されるのを見ると屢々攻め立て、槍砲を一斉に発射した。大小の弾丸が雨の如く身体のそばに落下した」と太平軍の砲火にさらされた。また「砲台は出来たものの、砲は一方を打つことが出来るに止まり、賊人は狡猾でなお避難することが出来た」とあるように、清軍の砲弾は北伐軍陣地の東側にしか届かず、決定的な打撃を与えるには至らなかった。

そこで張錦文らは移動式砲架である「活砲架」を急ぎ製造して勝保の陣営へ送り、試し打ちしたところ、「立ちどころに賊巢をして傾倒させ、該逆はこれにより肝をつぶした」²⁴⁾と効果をあげた。僧格林沁も「幸いなことに前線では東西両面で高い砲台を築き、下へ向けて轟撃している。探報によればこの時の砲撃は以前よりも強力で、多くの賊を傷つけた。賊の陣地は堅固であるが、日夜砲撃を受けており、先のことを考えられない程に追いつめられている」²⁵⁾と報じており、これらの砲撃はかなりのダメージを与えたと考えられる。

さらにこの時期勝保が強調した「戦果」の一つとして、投降政策による北伐軍の兵力減少があった。独流、静海の戦いが始まってから、勝保はスパイの摘発と脅されて従った者の解散に努め、2,000名の「老幼男婦」を救出した²⁶⁾。また1月27日の戦闘では「多くの賊が刀を捨てて馬を降り、黄巾を脱ぎ去って道端に跪」いて降伏を求めた。勝保がそのうち13名を訊問したところ、彼らは広東潮州および湖南、湖北出身の元壮勇で、江南提督向荣が太平軍内に潜伏させたが、発覚して拘禁された者たちであった。その後彼らは「偽官」なって丞

相林鳳祥に仕えたが、投降を勧める勝保の告示を見て「密かに知り合いの湖広、江南各省の者と投降について相談」した。これを察知した林鳳祥によって多くの仲間が陣中に閉じこめられたが、彼らは出撃したチャンスを捉えて投降したという。

この事実を報じた勝保は「この十数名の賊を殺しても、全体の戦局に大きな利益はない。いま暫く彼らの死を免じて恩義を示せば……、賊営の脅されて従った者たちも話を聞きつけて投降する者が日に増え、首逆を捕まえやすくなるばかりか、賊の勢いも減ほし易い」²⁷⁾とあるように、彼らの降伏を認めて北伐軍内の動揺を誘うことが得策であると述べている。むしろ捕虜となった張興保（湖南道州人）は独流鎮の北伐軍が「連れ去られた民人も含めて全部で一万人以上」²⁸⁾と供述しており、総兵力が1万人を切ったとする勝保の報告はあくまで希望的観測であった。だが彼は「賊の勢いは日に衰え、内紛はまさに起こらんとしており、あえて戦おうとしないだけでなく、守ることも長くは続かない。勢いだけ必死になって逃竄を図る道だけが残っている」²⁹⁾と指摘して、近く北伐軍が移動を始めると予想した。それは結果として正しい判断だったと言えるだろう。

ところで陳思伯『復生録』はこの時期のこととして次のように回想している。

相持して十二月に至り、湖は凍りつき、人が行き来出来るようになった。賊は焦って、人を派遣して氷の道を調べさせた。不意に湖中の三つの村に兵船百隻が停泊し、陣地を三つ作り、陣地の外には氷を割って溝を作り、出ることが出来ないようにした。賊は氷車二十四両を作ったが、その高さは五尺で、内外に木板があり、中の空洞には本を詰めた。どの車にも砲眼が二つあり、下には丸い鉄の小さな車輪が四つついていて、左右は鉄の輪を掛けて結ぶようになっていた。分ければ一人で素早く推すことが出来、合わせれば繋がってまるで月城のようだった。

また長い木に草二、三束をつけ、車の後から進んだ。氷の溝に突き当たると、木を水の中に放り投げた。北風が吹き付けると、草はすぐに凍り付き、片時で凍って氷の橋となって、賊は長駆前進した。除夜に三つの陣地を続けざまに破り、兵民船戸は皆殺されて、一人として逃げおおせた者はなかった。夜半になって官軍の大営から賞号の氷船八隻が、陣地が陥落したことを知らずにやって来た。だが突然襲われて、船の中の物資は悉く賊のものとなった。³⁰⁾

この戦闘に関する清朝側の記録は明確ではない。勝保は1月27日に静海県の太平軍2,000名が出撃し、烏征阿の「水営盤」を撃った。清軍が応戦すると、太平軍は経文岱の「水営」に向かい、やがて多くは静海県城に撤退した。だが数百名の「零匪」はすでに氷濠を越え、帰還出来なくなったため、于家荘、東河頭村を占拠して王家口を窺っていると報じた³¹⁾。僧格林沁も静海県の太平軍数百名が王家口を攻めたと述べたうえで、「逆匪は小船と木筏を担ぎ、強引に運河を渡り梁頭、李家荘などに至って擾害した」³²⁾と述べている。ここ

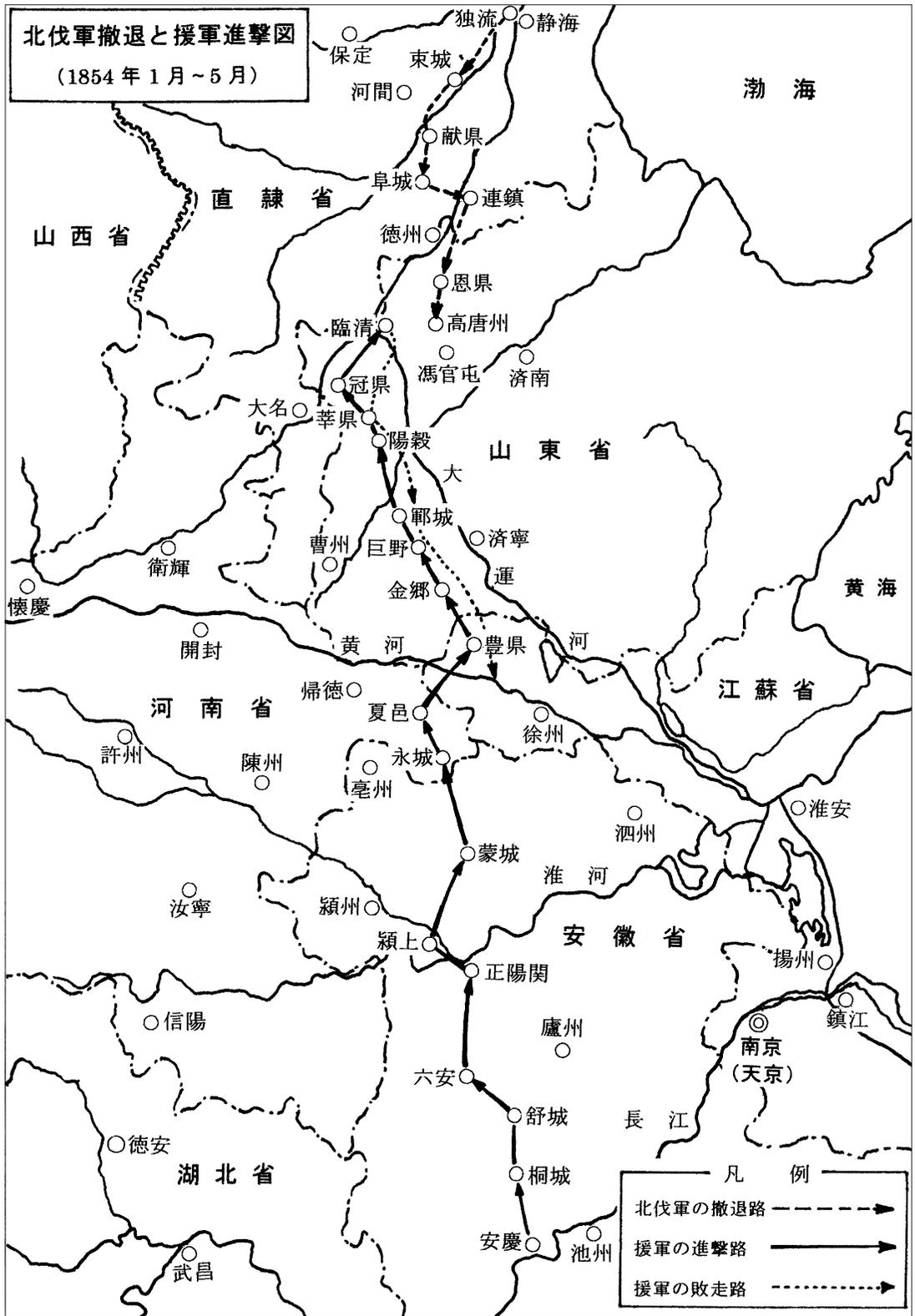


図1 北伐軍撤退と援軍進撃図

で「湖中の三つの村」あるいは「水営盤」「水営」とあるのは、北伐軍、清軍の双方が葡萄窪や静海県の西岸で運河の堤防を決壊させ、陣地の周囲に水をはりめぐらせた結果であった³³⁾。また「賞号の水船」とは年越しの褒美を載せた船と考えられ、清軍の陣営内で旧正月を祝う準備が進められていた様子が窺われる。大晦日に新兵器を投入して静海県の西方に拠点を築いた北伐軍の行動からは、清軍の隙を突き、凍結した河川を活用して新たな攻勢をかけようとする意図を見ることが出来る。

1854年1月29日に北伐軍は独流、静海県の陣地を放棄し、清軍の防備が手薄だった西南方面へ移動を開始した（図1参照）。この動きに最初に気づいたのはやはり勝保であり、于家荘、東河頭村を占拠した太平軍に静海県城から援軍が送られたと指摘し、「軍情は变幻自在で、朝夕で一定しない。この時逆匪の意図は西側にあり、局面はまた一変しているようだ」と述べて配下の兵1,200名を交通の要地である王家口へ向かわせた。また彼は「賊は西へ向かって逃げ出したが、北へ向かうことは出来ないため、勢い方向を変えて南へ向かうだろう³⁴⁾とあるように、北伐軍の意図が撤退にあると予想した。実際には王自彛が「王家口を攻めた後に直接保定へ向かい、さらに北進しようと考えた³⁵⁾と供述したように、必ずしもこの段階で北京攻略が放棄されていた訳ではなかった。

この時勝保は北伐軍西進の動きを押さえられなかった巴里坤総兵経文岱らを非難すると共に、僧格林沁に自分の陣営を訪ねて「一切を相談し、剿辦の全局を熟籌するのに役立てたい³⁶⁾と要請した。僧格林沁がこれを拒否すると、清朝は彼に直接王家口へ向かうように指示し、「勝保と該大臣は共に一事をなすのであるから、互いに応援し、万が一にも意見の食い違いから事態を誤らせてはならない³⁷⁾と釘を刺した。だが2月3日に僧格林沁が兵2,000名を王慶坨に残し、騎兵1,000名を率いて王家口に到着すると、兵力不足を危惧した彼は勝保の命令で子牙鎮へ移動しようとした瑞昌に王家口に留まるように命じた。これを知った勝保は激怒し、「僧格林沁は全局を顧みない」「初めて前線へ至るや、かくの如く一切が自分の気の向くままである³⁸⁾と告発した。2月5日に独流鎮の北伐軍が全て退出すると、清朝は一度僧格林沁に王家口の兵を勝保へ引き渡し、自らは王慶坨に戻って防備を固めるように命じた³⁹⁾。だが勝保が「賊の足跡は静海へ帰したのか、河西へ向かったのかなお判断できない⁴⁰⁾と独流鎮を撤退した太平軍の方向を見失ったため、追撃の任務は結局のところ僧格林沁が担うことになった。それは北伐軍掃蕩の主役が勝保から僧格林沁へ交替したことを意味していた。

さて陳思伯『復生録』は北伐軍の撤退の様子を次のように回想している。

甲寅四年(1854)の正月初めに林逆〔鳳祥〕は独流から静海に駐屯していた李逆〔開芳〕に伝令を出して、夜に氷上の雪を踏んで急ぎ行くことになった。氷の道を歩くこと六十里余り、東の方がようやく明るみ、初めて運河の土手に登ることが出来た。厚い包囲は突破したが、氷の上で休息したまま凍死した賊の死体が道中に見られた。次の朝に

土手へ登ると、座ったり、寝ている賊が大勢いた。初めは眠っているのだと思い、声をかけたが目を覚まさず、手で推したところそのまま倒れてしまい、ようやく全て凍死したのだと知った。

お昼近くになったが、なお大声で熱いと叫びながら、自ら着た服を脱いで雪を食べ、雪の中に倒れ込んで死ぬ者もいた。全身が真っ赤で、外から寒さを受けたために陽気が内攻して心臓に達したのだと思われた。私は一晩中氷の上だったが、足は停まることなく、次日の午後になってようやく休息を得た。また一晩行軍したが、幸いにも携帯していた麵を食べたので飢えずに済んだ。三日目になって前隊が陳穀莊に駐屯したと聞いた。聞けば静海県から三百余里の遠くまで来たとのことだった。⁴¹⁾

ここからは北伐軍が夜間の脱出作戦に成功したものの、厳しい寒さによって多くの犠牲者を出したことが窺われる。すでに別稿で見たように北伐軍は戦闘時に「長衣」を着ることを許さなかったが、参加した新兵に「綿入れの服とズボンを与えた」⁴²⁾との供述もあり、寒さへの対策を怠っていた訳ではなかった。だが湖面が凍り付いた厳寒期、しかも夜間に長距離の移動を行うことは、将兵に大きな負担を強いることになった。2月6日に出撃した僧格林沁は「前進して追撃したところ、賊匪は潰走して全く戦う意志がなく、力を尽くして追殺すること無数、夜明けに白楊橋についた。この間百里余り、賊の屍が野に満ちて、大勝利であった」⁴³⁾と報じた。実のところ彼の部隊は実戦経験がなく、その戦果は「子牙鎮から張家莊まで六十余里の間、賊の死体が枕を並べること絡繹として絶えず、およそ長髪賊匪一千余名を殺した」「該逆の後隊は約六、七百人であったが、全て殲滅した」⁴⁴⁾とあるように、すでに凍死したか、行軍について行けず落後した将兵を相手としたものだった。だが僧格林沁自身が「この度の連日の大勝利によって、士気は大いに上がっている」⁴⁵⁾と述べたように、緒戦の勝利は僧格林沁軍に大きな自信と勢いを与えた。以後彼の部隊は北伐軍征討の主力として活躍することになったのである。

(b) 東城村の戦いと阜城県への敗走

独流、静海を脱出した北伐軍主力は、2月7日に80キロ近く離れた河間県東北の東城村に到達した。この間北伐軍が受けた損害は2,000名程度で、なおかなりの戦闘力を擁していた⁴⁶⁾。また東城村の周囲にある桃園村、西成村にも部隊を駐屯させて迎撃体制を整えた⁴⁷⁾。同じ日に僧格林沁も東城村に至ったが、「該逆は大胆にも隊列を作って抗拒し、槍炮、火箭、噴筒を続けざまにわが兵に向けて発射した」とあるように北伐軍の抵抗を受けた。翌日も両軍は交戦したが、僧格林沁とチャハル副都統西凌阿は大砲を携行しておらず、兵力も3,000名と少なかったために攻撃を急がず、援軍の到着を待つことにした⁴⁸⁾。

北伐軍の行方を見失った勝保が騎兵500名を率いて東城村に到着したのは2月10日であった。東城村一帯の地形を視察した二人は「多く兵力を集め、四面から圍剿」すべきだと考

え、任邱県に駐屯していた戸部右侍郎瑞麟、欽差倉場侍郎慶祺の兵を東城村へ向かわせた。また天津から大砲を送らせて攻撃に備えた⁴⁹⁾。清朝も固安から任邱県へ到着した幫辦軍務徳勒克色楞の兵 1,000 名を僧格林沁の応援に向かわせた⁵⁰⁾。

いっぽう北伐軍は「該逆は独流、静海でいまだ大打撃を受けず、全ての隊が奔走したが、現在立てこもった村は独流、静海のように難攻不落ではなく、貯蔵している米穀もそれほど多くない⁵¹⁾とあるようにほぼ全軍の移動に成功したものの、東城村は長期の籠城には不向きな土地であった。食糧を確保することも難しく、僧格林沁は「該逆は舒成（東城村をさす）付近の四、五の村莊を占拠し、日が昇ると食糧を搶掠しているが、その意図は道を探して逃げることにある⁵²⁾とあるように、食糧の調達に追われている状況から見て長く駐屯することはないと予想した。また僧格林沁は次のように述べている。

東城村一帯は村落が密集し、大小の村が相連なっている。樹木も鬱蒼と生えており、逆匪は六、七の村莊に分かれて立てこもっている。各地の要所に兵を分けて駐屯させ、小部隊の賊が夜に食糧を奪いに來たが、屢々わが兵がこれを防ぎ殺した。だが少しでも油断すれば、附近の食糧が賊のものとなるばかりか、村民もその害を受けることになる。しかも逃げ出した難民や生け捕った賊犯の言うところでは、彼らは公然と逃げ出すことは敢えてせず、一步また一步と陣地を移して前進し、村莊を占領して隙を見て逃げようとしているとのことだ。そこで私たちは……告示を出して、西南両方面で賊巢から三十里以内の村々の人民に、所有する食糧や飼料を全て運び出して遠方へ避難し、賊が平定された後に帰郷させることにした。こうすれば賊匪は野に奪い取るべきものがなく、その勢いはおのずから潰えるだろう。⁵³⁾

ここからは清軍が北伐軍の食糧補給を断とうと図り、夜間に村外へ出かけて調達を図る小部隊を迎撃すると共に、東城村から 15 キロ以内の住民を食糧、飼料と共に強制的に避難させたことが窺われる。この時勝保の陣営にいた直隸布政使張集馨は「[東城の東にある] 九村の東側にはなお数ヶ村あり、婦女は秘かに逃げ出したが、男たちは利益を求めて賊に通じた」と述べており、周囲の村々では北伐軍に物資と情報を提供する者がいた。だが勝保はこの「通賊者」を捕らえて殺し、兵勇にこれらの村々をことごとく焼き払わせたため、「賊はこうして耳目を失った⁵⁴⁾とあるように北伐軍は協力者を失ったという。

結局のところ北伐軍は東城数ヶ村の要塞化を進め、再び清軍と対峙した。2 月中旬に僧格林沁らは「毎日各路の官兵を親しく率いて出撃し、賊が占拠している各村を力の限り攻め立てているが、該逆は狡猾なること異常で、固く隠れて出てこない」「現在該逆が恃みとしているのは各村を死守することであり、牆壁を囲み、砲を並べている。その砲火は猛烈で、わが兵はその巢穴に近づき逼ることが難しい⁵⁵⁾と報じている。また張集馨によると東城村の北伐軍陣地は高さ、厚さ共に 10 メートルの土塁に囲まれ、壁には銃丸が開けられていた。

土塁のない部分には木城が築かれ、その上には泥が厚く塗られたとある⁵⁶⁾。

さらに北伐軍が東城に留まらざるを得なかった理由の一つに、悪天候下の行軍による将兵の凍傷があった。元々太平軍将兵は南方の出身で、寒さを苦手としていたが、「昨冬からの雪と冷え込みは過去と比べても多く、日数も長かった」という。また独流鎮を脱出した彼らは「白布を着て雪の上を匍って行った」ために、多くの者が「腿や脚の皸が裂⁵⁷⁾けて凍傷となった。陳思伯も行軍の途中、残り火の上に乗ることで凍傷の悪化を免れたが、両腕は半月以上も曲がらず、左手の指2本が壊疽を起こしてしまったという⁵⁸⁾。

初めのうち攻めあぐねていた清軍であったが、2月22日に500斤の大砲が戦線に到着すると、早速翌23日にこれを用いて攻撃をかけた⁵⁹⁾。すると北伐軍は24日夜に1,000名余りの兵力で遵祖莊、念祖莊の清軍陣地を襲撃した⁶⁰⁾。東城村の東1キロにある九村に駐屯していた張集馨が陣地を巡回していると、「賊の攻撃だ」との知らせが入り、西南から無数の火弾が清軍陣地に投げ込まれるのが見えた。そこで彼は壮勇に発砲を命じると共に、勝保の陣営に救援を求めた。約二時間後に西北にあった西安副都統雙成の陣地で火の手が上がり、「殺せ！」という叫び声が聞こえた。しばらくすると雙成が狼狽して姿を見せ、彼の陣地が襲われて満洲兵100名以上が殺され、馬300匹が奪われたことを知った。雙成の部隊は警戒を怠り、寝入ったところを襲われたため、死者はみな衣服を身につけていなかった。彼と崇恩は担当する陣地が敵陣に近過ぎるため、勝保に兵の増強を求めたが認められなかったという⁶¹⁾。

北伐軍の出撃で屢々損害を受けた僧格林沁は、砲撃を続ける一方で東城村の周囲に深い壕を張り巡らせ、兵糧攻めを行うことにした。彼が作戦を変更した重要な理由は「昨年地は多く水害に見舞われたが、現在氷と雪が溶け始め、平地の泥は深さが一尺余りになった。賊巢に近づくに泥水はさらに増し、歩兵隊の攻撃は困難になった」⁶²⁾とあるように、雪融けの時期を迎え、昨年来の洪水の影響で地上が泥に掩われ、行動が著しく制約されたためだった。すでに僧格林沁は「捕らえた密偵の供述によれば、賊は食糧がまさに尽きようとしており、数日以内に他へ逃げ出そうとしている」⁶³⁾という情報をつかんでいた。そして北伐軍が「必死になって奔撲」するのでなければ、「遠からず賊巢の食糧は尽き、こちらが攻めなくても自分から潰えるだろう」⁶⁴⁾と予想した。

3月7日夜に北伐軍は東南へ向けて移動を開始した。この時も北伐軍は清軍に気づかれないうちに東城村を撤退し、張集馨は翌8日に「煙が上がらないのを見て心秘かに疑い、再び斥候を派遣したところ、初めて大部隊がすでに逃げたことを知った」⁶⁵⁾と述べている。だが今回の行軍は独流、静海からの撤退とは全く条件が異なっていた。陳思伯は次のように回想している。

二月になって林逆は突然までも命令を下し、陳穀村から夜に出発した。ちょうど北方の道の氷が溶ける日だったため、途中はどこも沈殿した泥におおわれていた。これで足

を凍傷にやられた賊がどうして歩くことが出来ようか？彼らは一度泥の中に足を取られると、声をあげて助けを求めた。だが賊目は官軍が気づいて追撃して来るのを恐れ、刀を抜いて自らの手で殺した。気の毒なことだ。また足が痛んで落後した者は、ことごとく官軍に首を切られてしまった。この夜に泥にはまって死んだ悍賊の数は一万を超えた⁶⁶⁾。

ここからは林鳳祥が一面の泥という悪条件を無視して軍に移動を命じ、凍傷の癒えていなかった多くの将兵が犠牲となった様子が窺われる。元々北伐軍が脱出した東城村の東南は「積み重なった泥が一尺余りから二、三尺」⁶⁷⁾と言われるほど泥が深く、清軍が濠の代わりに鹿の角や木の柵でバリケードを築いた場所だった。泥に足を取られた兵士が救いを求めると、清軍に察知されるのを恐れた上官たちが口封じのため殺した。馬も多くが泥にはまり、歩行困難で馬に乗っていた陳思伯も一度は自害を覚悟したという⁶⁸⁾。さらに彼らに追い打ちをかけたのが清軍の追撃だった。僧格林沁は次のように報じている。

逆賊は囲まれて焦り、活路がなくなるのを恐れて、初九日（3月7日）亥刻に深い霧に紛れて、命を捨てて小礼文から東南へ向かって逃げ出した。関所を守る兵がその声を聞いて攻撃したところ、逆匪は死にながら逃げ、歩兵や驃馬で泥に陥り、死んだ者が数え切れなかった。綏遠城將軍善祿も近くから兵を率いて念祖橋に赴いて攻撃した。該逆は千々に乱れて逃亡したが、また必死になって抵抗した。わが兵は力の限り攻撃し、賊七、八百名を殺した。賊の死体がそこら中ころがり、大小の黄旗五十余面と鉄の大砲四門、火薬や武器を多数捕獲した。

賊は運河の土手を西南へ向かって逃走した。私は夜に乗じて全軍を幾つかの道に分け、騎兵を率いて跡を追った。また他の者に歩兵部隊を統率させて前進させ、土手沿いに村々を搜索して二百余名を殺した。賊は狂ったように逃げたが、私は各地の橋をすでに破壊させていた。そこで彼らは辺馬橋に至ると、ついに郷民に木で橋の穴を補修させて渡河した。わが兵が後から追いつき、河辺に至ると、賊はすでに河を渡り終えており、橋を焼き払った。私が賊家橋から回り道をして橋をかけ渡河すると、該逆はすでに猷県に逃げ込んでいた。私たち僧格林沁と勝保が前後して到着し、官兵を率いて……攻撃すると、彼らは城に立て籠もらず、南門から逃走した。⁶⁹⁾

ここからは北伐軍の脱出に一部の清軍が気づき、追撃を行った様子が窺われる。また行軍の障害となったのは各地の橋が破壊されていたことで、念祖橋を渡河出来なかった師帥率いる兵600名は善祿の軍を迎え撃ったが「全数が殺斃」された。この清軍の追撃は猷県の南にある富荘駅まで80キロにわたって続き、「賊の屍は枕を並べ、全部で賊を斃すこと一千余名、生け捕ったのは五十余名」であった。また清軍の損害は戦死2名、負傷20余名だっ

たとい、清軍の圧勝であった⁷⁰⁾。

3月9日に北伐軍の先鋒隊は富荘駅の南20キロにある阜城県に到達した。この地を守っていた「郷勇は潰散」したため、抵抗を受けずに入城したこの部隊はようやく一息ついた。だが悲劇はまだ終わらなかった。陳思伯によると、この日彼の所属していた後衛部隊は「馬軍の突撃を受けて逃走し、同館の者は四散」して行方がわからなくなった。清軍に追われた彼と右一軍旅帥の鄭阿培は前二、前五軍の陣地に逃げ込んだが、そこは最前線で危険なため南へ向かい、後一、後二軍の陣地に到達した。鄭阿培はそこに留まろうとしたが、不吉な予感がした陳思伯はさらに移動を促し、夜明け前によく阜城県城外にいた右軍検点朱錫琨の先鋒隊陣地にたどりついた。果たして10日の夜明けに清軍の一斉攻撃が始まり、各軍は「互いに顧みることが出来なかった」。前二軍で生き残ったのは僅か70名、後一軍も清軍の追撃を振り切って阜城县城へ逃げ込んだのは百数十名であった⁷¹⁾。

この戦いについて僧格林沁は、富荘駅から南へ逃走する北伐軍に待ち伏せ攻撃をかけたところ、「該逆は潰え逃れた後だったため、戦わずして自ら乱れた。わが兵は賊の隊列に突撃をかけ、また賊七百余名を殺した。この日は屢々戦って勝利し、およそ賊一千六百名を殺し、三百名を生け捕った⁷²⁾と述べている。また陳思伯は清軍の攻撃を受けた「二つの部隊は全部で六、七千人いたが、生き延びたのは十分の一に満たず、残りは全て官兵に殺された。この敗北は足が凍って力を出せなかったことによる⁷³⁾と記している。2,500人を1万人と数える太平軍の慣行から見ても、2,000名弱の損失という僧格林沁の報告はかなり確度の高い内容と考えられる。

2. 北伐援軍の北上と臨清攻撃

(a) 北伐援軍の派遣とその勢力拡大

さて話は北伐軍が独流、静海で籠城を続けていた1853年12月にさかのぼる。この月26日に揚州で清軍と対峙していた夏官又正丞相曾立昌⁷⁴⁾、夏官副丞相陳世保⁷⁵⁾の部隊は南京対岸の瓜洲への移動を命じられた。その後彼らは安徽の安慶へ赴いたが、ここで冬官副丞相許宗揚⁷⁶⁾の軍が加わって北伐援軍が編制された。

この北伐援軍の規模については、張守常氏が15軍、7,000人という見解を出されている⁷⁷⁾。またかつて北伐援軍の総帥とされた総制黄生才（湖南衡州府人）についても、それが清朝官僚の功名争いの中で捏造された「事実」であることを明らかにした⁷⁸⁾。実のところ援軍兵士だった張大其（湖北黃陂県人）は「十二月に北辺の賊匪が官兵に包囲されたと聞き、賊衆は相談して天津へ行って包囲を解くことにした。この月二十八日（2月1日）に賊の丞相だった曾姓、胡姓、許姓、陳姓が十五軍、軍ごとに二千五百人を率い、二手に分かれて出発した⁷⁹⁾と供述しており、黄生才は援軍の指揮官に挙げられていない。また援軍の兵力が15軍で構成されていた事実も疑えないと思われる。

ここで疑問点として挙げられるのは、何故援軍が揚州あるいは北伐軍と同じく南京から出

発せず、わざわざ安慶で編制、派遣されたかという点である。確かに揚州には欽差大臣琦善の率いる清軍がいたが、11月に曾立昌は南京から派遣された頼漢英の軍と共に揚州東路の郷勇を撃破しており、彼らが揚州を撤退した時も「ついに一兵一勇も追撃する者はない」⁸⁰⁾とあるように清軍の反撃はなかった。半年間の籠城戦で消耗が激しかった彼らがすぐに北上出来ず、休息と部隊再編のために南京へ戻る必要があったとしても、安慶を経由したことは援軍の出発を1854年2月まで遅らせる原因になったと考えられる。

すでに見たように当時の太平天国首脳は北京の清軍兵力を過大視した密偵の報告を受け、援軍の派遣に慎重な姿勢を取っていた⁸¹⁾。また1853年後半は西征軍の活動範囲が江西から安徽、湖北へ広がり、安徽巡撫江忠源の抵抗によって廬州攻略に手間取るなど兵力は不足気味であった⁸²⁾。北伐援軍がまず安徽へ派遣され、1854年1月の廬州占領後によりやく北上を開始したのは、長江中流域の戦況に左右された結果であったと考えられる。

ちなみに援軍の出発が紆余曲折を経たことは、派遣された軍の規模にも影響を与えた。黄生才の供述によると、初め東王楊秀清は頂天侯秦日綱（のち燕王）に援軍の統率を任せるつもりだったが、彼は南京に呼び戻された翼王石達開に代わって安慶の守備についたという⁸³⁾。曾立昌らが敗退した1854年5月に楊秀清は秦日綱に第二次の援軍として北進するように命じており⁸⁴⁾、元々秦日綱が援軍の司令官に予定されていた可能性は否定できない。また秦日綱の派遣が中止されれば、援軍の兵力は彼の部隊が安慶に留まった分だけ目減りしたと考えられる。姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』は援軍について「十五軍から成り、一軍ごとに五百人で、全部で七千五百人」⁸⁵⁾と記している。また張大其は「戦える者は軍服に『将士』の二文字を記しているが、一万人に満たない」⁸⁶⁾と述べており、主力となる部隊は数千人の規模だったと推測される。

出発の遅れた北伐援軍であったが、2月初めに安慶を出てからの進撃は速かった。彼らは2月6日に桐城県、8日に舒城県を通過し、17日には六安州城を占領した⁸⁷⁾。ここから援軍は廬州方面へ向かわずに北上し、21日には淮河沿岸の正陽関に到達した⁸⁸⁾。さらに潁河沿いに進んで24日に潁上県へ入り、3月1日には北伐軍が1853年6月に通過した蒙城県を再占領した。

この頃江南提督和春が率いる安徽の清軍は廬州の太平軍と対峙しており、北伐援軍の動きを抑えられなかったばかりか、それが太平軍の一隊であることを認識出来なかった。臨淮関一帯で捻軍の鎮圧に当たっていた兵科掌印給事中の袁甲三（河南項城県人）は「該匪らの旗幟、衣服は多くが逆賊の色、模様を真似ており、顔を塗ったりヒゲを描いて威嚇しているため、住民であえて矛を構える者はいない。それが土匪の逆匪を装った者であることは殆ど疑いがない」⁸⁹⁾と述べており、北伐軍の進撃時にも見られた「仮装粵匪」即ちニセ太平軍との見解を示している。また徐州鎮総兵百勝、徐州道王夢齡は3月10日に援軍が江蘇蕭県の西北にある黄家口に到達すると、「土匪が逆匪を騙り、大隊が後からやってくるぞと公言して焚掠にほしいままにした」と報じたうえで次のように述べている。

今回逆匪が六安から北に向かっているのは、土匪が先導を務めている。いたるところ驚き疑って区別が出来ず、共に戦わずに敗れている。ついに未だ賊に従っていない土匪までが相率いて真似をしており、実に憤懣に堪えない。⁹⁰⁾

ここで百勝らは北伐援軍の進撃を先導したのが地元の反体制勢力であると述べている。実際に六安州では2月13日に住民の動揺が広がると、14日に地元の顔役に率いられた「長髪」が城に入り、16日からは「奸民」の先導を受けた「大股の賊匪」が次々と入城した⁹¹⁾。また潁上県では1853年7月に「回勇（イスラム教徒の壮勇）」と漢人の練勇間の対立をきっかけに「漢回」の武力抗争が発生したが⁹²⁾、その関係者であった陳常泗は差役と共に太平軍に呼応し、地方官が城を出ている隙に「衆を率いて擁入し、大いに焚掠をほしのままにした」⁹³⁾という。さらに蒙城県でも「先に来たのは実に土匪であり、後から逆匪が追うようにして至り、偽官である許、陳二姓の名を列した偽示を貼り出した」⁹⁴⁾とあるように、許宗揚、陳世保の部隊を先導したのは地元の反乱勢力だった。それは1年前の北伐軍の進撃時と比べても特徴的な現象であった。

こうした変化が生まれた理由は何であろうか。『山東軍興紀略』は太平軍が南京を占領してから漕米の輸送が滞り、大運河の輸送業者など数十万人が失業したこと、黄河の堤防が毎年のように決壊して数万人の「飢民」が発生したことを挙げている⁹⁵⁾。事実1853年2月に会試受験のために蘇州北部を旅した曹藍田（安徽銅陵県人）は、「清江浦に至るや、飢民が道の両側に並んでおり、悲しみ嘆く声がどこまでも続いていた」⁹⁶⁾と記している。また4月に安徽巡撫李嘉端は山東、江蘇省境の惨状について「人が人を食うに至っており、実に尋常の飢饉ではない」と述べたうえで、「現在江南では逆匪が猖狂しており、安徽北境では捻匪が四起している。もし飢民の丈夫な男たちが出かけて結びつくことがあれば、その害は言うに堪えない」⁹⁷⁾とあるように、彼らが南京の太平軍や安徽で活動していた捻子と結びつくことに懸念を表明していた。

1853年の北伐軍の進撃は「粵匪は至るところで官に復讐したが民を害さず……、匪賊は益々大胆になった」⁹⁸⁾とあるように、兵部侍郎銜周天爵の弾圧策で一時期沈黙していた安徽の反体制勢力を活気づけた。河南でも「帰徳は逆賊によって竄擾されて後、各地の捻匪が機に乗じて蜂起し、蜂擁として搶劫するなど、勢いは甚だ猖獗」⁹⁹⁾と言われたように、北伐軍の通過をきっかけとして捻子の活動が盛んとなった。

最初に目立った動きを見せたのは潁州の「捻匪」である鄧六、李月らで、蒙城県の雒河集に1,000余名を集めて活動し¹⁰⁰⁾、8月には「捻匪の総頭目」だった馬老虎が清軍に待ち伏せ攻撃をかけた¹⁰¹⁾。10月に周天爵が病死すると捻子の勢いは増し、阜陽、亳州などの捻子は「五十八股を一捻」と結集し、「大半は紅巾を頭に巻き」「興國天子、齊天大聖、替天行道、八卦、飛龍、帥字」と記された旗を掲げて、周天爵が率いていた臧紆青の壮勇を引き継いだ袁甲三や潁州府知府張清元の軍と戦ったが敗北した¹⁰²⁾。

すると11月に「総捻首」の鄧大俊は「報復」を図り、鄧天児ら30余名の「捻首」と結盟して「官兵と死闘すると誓い」を立てた。袁甲三は「この地の捻首は数えきれず、あるいは数千人、数百人を率い、あるいは数十人を率いて雄を争い、長を称えている。分かれたと思えば集まり、富紳で結捻する者もいれば、婦人で人を集め略奪する者もいる。およそ人を集められることを強さと思われ、死を恐れないことを誉れと考えている」¹⁰³とあるように、捻子が安徽北部の慣行を基盤として地域社会に深く浸透し、有力者や女性出身の捻子もいるなど幅広いすそ野を持っていたと指摘している。

檔案史料によると、劉利害（河南信陽州人）は1853年7月に「捻頭」黄九の仲間に入り、紅布を頭に巻き「粵匪を仮充」して桐柏県の呉城地方で略奪を働いた¹⁰⁴。また北伐援軍と関わりを持った例として、「潰勇」の頭目だった李三闢（即ち李興清、江蘇泗洲人）が挙げられる。彼は1853年春に数百人を率いて揚州の清軍陣営へ赴き、郷勇頭目となって守備（五品頂戴）に昇進した。だが12月に曾立昌らに敗北した彼は泗州へ逃げ帰り、高家集に盤踞して2-3,000人を集め、「外の者が窺い探ることを許さず、附近の住民に食物、火槍などを送らせた。また村の外に土城を築いた」¹⁰⁵とあるように自立的な地方勢力に成長した。漕運総督福済は懐柔を図ったが、李三闢が兵力の削減を拒否したため、「逆迹は顕らか」と見た袁甲三は1854年正月に臧紆青の壮勇に高家集を攻撃させた¹⁰⁶。敗北した李三闢は宿遷県で殺されたが¹⁰⁷、その配下は「（曾立昌らは）皖營の潰勇であった李三闢らの衆を先導とした」¹⁰⁸とあるように北伐援軍に加わったという。

もう一つ北伐援軍に呼応した勢力として「教匪（白蓮教徒）」あるいは「捻匪」と言われた張捷三がいた¹⁰⁹。彼は1853年12月に太平順天王を名乗り、王得興（兵部大都督）と共に「永、亳、蒙一带および外来の捻頭を糾合して一股に合わせ、義門集を総巢、臨湖鋪を分巢として数十里の間を焚掠」した。清軍が弾圧に向かうと彼らは抵抗し、数百人の死者を出して敗北したが、この時清軍は「太平天国金四正將軍」と記された旗を獲得した。袁甲三はその旗が新品でなく、太平軍指揮官の姓が記されていると指摘したうえで、彼らが「粵賊と勾通したことは疑いを容れない」¹¹⁰と結論づけている。

さて北伐援軍は3月6日に河南省の永城県に到着し、翌7日に夏邑県を占領した¹¹¹。それまで蒙城県で知県劉瀛階の率いる練勇と交戦したのを除くと¹¹²、殆ど抵抗を受けずに進軍してきた援軍は、ここで馬殿安（武生）らが率いる郷勇と戦い、280人余りを殺害して県城を焼き払った¹¹³。また3月10日に援軍が黄家口に到達すると、王星燧（監生）、王星煌（諸生）兄弟の団練が抵抗を試みて敗北した¹¹⁴。この時援軍は「賊は約二万人で、馬は千余匹、大砲二十余門」¹¹⁵とあるように兵力を急速に伸ばしていたが、大量の新規参加者によって土着の反乱勢力と区別がつかなかった。加えて多くの郷勇、団練指導者は太平軍の戦闘力について認識不足で、安易に戦いを挑んで敗北したと見られる。

黄家口から渡河可能な地点を探して東へ向かった援軍は、豊工下流の包家楼で「家を壊して橋を立て、筏を造って、十六日（3月14日）から十八日（16日）の日没までに次々と渡

り終えた」¹¹⁶⁾とあるように黄河を渡ることに成功した。また先に渡河した部隊は北岸に拠点
を築き、17日には豊京城を占領して山東へ入る構えを見せた¹¹⁷⁾。ところがこの時南京から
「廬州府が激しく攻められている」との知らせが届いたため、許宗揚は「後から直隸に向か
う」と言い残して後衛部隊2-3,000名を率いて安徽へ引き返した¹¹⁸⁾。

この兵力拡大の最中に行われた部隊の引き抜きは、その後の援軍の活動に大きな障害をも
たらした。すでに見たように太平軍は新しく加わった反体制勢力を戦闘に参加させず、その
組織を解体したうえで既存の部隊へ編入し、厳しい管理下に置くことで軍の統率を維持して
いた¹¹⁹⁾。だが援軍の場合「賊の人数は多いが、その中で長毛の真賊は三分の一に過ぎず、
残りは皆脅されて従った土匪」¹²⁰⁾「真の長髪賊は二千名に過ぎず、捻匪並びに脅されて従っ
た者は万余人」¹²¹⁾とあるように、新兵の割合が主力部隊を大きく上回ったため、彼らを訓練
あるいは統制することは難しかったと考えられる。

また援軍本隊の兵員構成について見た場合、「真に長髪の者は寥々で、髪を蓄えること
二、三寸或いは四、五寸の者が多く、みな六安、正陽関から来ている」¹²²⁾「賊匪には湖北な
まりの者が多く、新たに蓄えた髪は一、二寸」¹²³⁾とあるように、拳兵以来の老兄弟は極めて
少なかった。これは援軍が安慶で慌ただしく編制された結果であったが、彼らの多くは西征
軍の他の部隊と同じく経験不足で統率力を欠いていた。

この結果援軍が進撃した地域では「殺戮はそれほど行わなかったが、羣賊が野に満ちあふ
れ、どこもかしこも蹂躪して、城中は死体が枕を並べた……。郷里の無頼が物をかすめ取っ
ても、持ち主は一言も発することができなかつた。十三日(3月11日)には再び土匪が隊
を作って入城し、搜掠すること一空」¹²⁴⁾とあるように、援軍は新兵の暴行や掠奪を抑えられ
ず、また捻子などの勢力が独自の組織を維持したまま行動することを禁止できなかつた。そ
れは援軍にとって致命的な結果をもたらすことになる。

(b) 援軍の山東進出と臨清攻防戦

ところで北伐援軍はどこへ向かっていたのであろうか。林鳳祥が援軍を要請するために南
京へ派遣した師帥劉鳳彩(湖南清泉県人)は、「山東の小道から保定府へ至って合流し、共
に北京を攻めるつもりだった」¹²⁵⁾と供述している。すでに見たように独流、静海を撤退した
北伐軍は直隸の保定をめざしており、援軍も山東を経由して保定へ向かう予定だったと考え
られる。3月18日に豊県劉家集で山東単県知県盧朝安らの率いる清軍、団練の抵抗を受け
た援軍は山東へ入り、19日に金郷県城を占領して知県楊鄭白を殺害した¹²⁶⁾。また22日には
巨野県を占領し、23日には鄆城県に到達した。さらに一部の部隊は22日に嘉祥県内で「村
荘を搶掠し、人々に逆匪を助けるように勸」¹²⁷⁾める活動を行った。

この頃清朝側は援軍の進撃方向をめぐって官僚たちの見解が分かれていた。3月初旬に袁
甲三は援軍が「廬州の大兵を牽制するように見せながら、実は隊を分けて他所へ向かい、も
って北賊を救援する」¹²⁸⁾とあるように、北伐軍の救援をめざしていると指摘した。だが援軍

が黄河に近づくと、江南河道総督楊以増は彼らが清軍の兵站基地がある徐州を攻撃するに違いないと主張した¹²⁹⁾。その後援軍が黄河を渡ると、徐州鎮総兵百勝らは援軍が「直隸の逆匪を救援しようとしている」¹³⁰⁾と考えたが、勝保は「阜城の賊を応援するのか、回り道をして別な場所から北へ向かうのか、いまだ定かではない」¹³¹⁾とあるように、援軍が別ルートで北京進攻をめざすことに懸念を表明した。

3月14日に援軍が永城県を通過したとの知らせを受けた清朝中央は、「逆匪が皖省から陸續として亳、永一帯に竄擾したのは、明らかに北竄を意図しているのであり、直隸の逆匪と互いに勾結している」¹³²⁾と述べたうえで、僧格林沁と勝保に命じて善禄と兵2,500名を劉家口へ派遣させた¹³³⁾。また援軍が黄河を渡ったとの報告を受けた3月20日には、阜城県での北伐軍本隊との戦いを僧格林沁一人に任せ、勝保に対して兵を率いて德州へ向かうように指示した¹³⁴⁾。

だがこの時安徽から黄河沿岸まで援軍を追撃してきた袁甲三は、「賊の行動は迅速で、現在すでに二日分の距離があり、万が一にも追いつくことは出来ない」¹³⁵⁾とあるように、渡河を断念して軍を撤退させ、河南、安徽方面の防衛に専念すると報じた。また楊以増は前漕運総督李湘棻に兵勇1,250名を率いて徐州へ向かわせたが、援軍に追いつくことは出来なかった¹³⁶⁾。援軍の北上を防ぐ兵力が不足とみた清朝は、3月26日に署直隸提督張殿元に河南、山東省境の大名へ向かうように命じ、山西巡撫恒春にも河南へ派遣する予定だった兵1,000名を大名へ送らせた¹³⁷⁾。

山東で防衛の責務を負っていたのは湖広総督を解任され、山東巡撫となった張亮基であった。1853年11月に彼は済南に到着したが、当時北伐軍は独流、静海にあり、山東布政使崇恩は直隸に近い武定府で防衛に当たっていた¹³⁸⁾。12月に武定と大運河沿いの德州を視察した張亮基は、山東の清軍兵力が他の戦場に動員されたために少なく、「軍械は揃わず、紀律も整っておらず、戦うにせよ守るにせよ全く恃むに足りない」ことを知った。そこで彼は杭州將軍瑞昌に德州へ進駐するように求めると共に、省内各地から壮丁40名ずつを集めて訓練し、2,000名の部隊を編制して守備に役立てることにした¹³⁹⁾。

次に張亮基を悩ませたのは戦費の不足であった。彼によると「山東の倉庫にある金は足りず、民の滞納額は一百五十万余両になる。普段の徴税でさえかくの如きで、現在の工面はさらに難しい。これは兵餉の憂うべき点である」¹⁴⁰⁾とあるように、山東は黄河の氾濫や飢饉、抗糧事件などの影響で財源が枯渇していた。また前任の山東巡撫李傅が融通した25万両をすでに使い果たし、德州に駐屯する兵の経費がかさんだため、1854年1月に張亮基は布政使倉庫の地丁銀10万両を暫く借用するように求めた¹⁴¹⁾。

ところが咸豊帝は德州の視察を終えた張亮基が一度済南に帰還したことに怒り、12月19日の上諭で即刻德州へ向かうように命じた¹⁴²⁾。また出発の期日を報じた張亮基の上奏に「省城（済南）は根本の重地」とあるのを見た咸豊帝は次のような硃批を書き記した。

山東にあっては根本でも、北省の大局や畿輔の重地と比べれば話は別だ。長沙に賊がいた時、なんじは常德にいて遠くこれを避けていた。独流に賊がいれば、汝は部下を前線に留めて、自分は後方に退いて再び避けている。もし省城が根本の重地であると言うなら、試みに問おう。長沙は楚南の根本ではなかったのか。¹⁴³⁾

ここからは長沙攻防戦で太平軍の北進を阻止できず、全国的な運動へ発展するきっかけを与えてしまった張亮基に対する咸豊帝の強い不信感を見ることが出来る。結局清朝は地丁銀10万両の借用を許可せず¹⁴⁴⁾、張亮基は捐納の銀を銅銭で納めさせる方法で戦費を工面したが、思うような成果を挙げることは出来なかった¹⁴⁵⁾。

3月24日に鄆城県から二手に分かれて北上した援軍は、翌日東昌府から3-40キロの張秋鎮、七級鎮に進んだ¹⁴⁶⁾。この頃善祿の清軍が東昌府に入城したため、援軍は西に向かって27日に陽穀県城を攻撃した。陽穀県は「城の備えは久しく廃れ、城壁は崩れて、人がその裂け目を通れる程」であり、太平軍接近の知らせが届くと「城内の住民は早くもみな避難」した。着任間もない陽穀県知県文穎は団練300名を守備につかせ、東昌の善祿に救援を求めたが、善祿は動かなかった。『陽穀殉難事実』は次のように述べている。

陽穀が失われた咎は軍を率いる者にあった。二十六日（3月24日）に東昌に至って陣を構え、陽穀からは僅か九十里であったが、模様眺めをして進まなかった。援軍の要請を続けざまに四度送ったが、ようやく届いた返事も言い訳ばかりであった。すると魯齋（文穎）はテーブルを叩いて言った。「死ぬのみだ！他に何を言おうか。賊が私を殺すのではない。将軍が私を殺すのだ！」。¹⁴⁷⁾

これに対して善祿は東昌に到着したのは25日午後で、陽穀県城の陥落には間に合わなかったと責任逃れをしたうえで、太平軍が東昌を攻撃するとの情報もあり、彼らの計略に陥らないために「多く偵察を出し、兵を厳しく統率して待つ」¹⁴⁸⁾ 必要があったと主張している。その後遺体収容のために陽穀県城を訪ねた文穎の親族は「土匪が横行し、初めは夜に家を焼くだけだったが、やがて白昼に略奪を行うようになった」「子供は泣き……、娘は身を投げようと井戸を探し、その惨状は言うに堪えなかった」¹⁴⁹⁾ と記している。

3月28日に援軍は西北に向かって莘県に到達し、翌29日には冠県を陥落させた¹⁵⁰⁾。だがここで援軍は再び進路を東に変え、30日には清水鎮に至った。この進路変更について『粵匪南北滋擾紀略』は「賊は元々館陶県へ行こうとしていたが、案内の者が道を誤った」¹⁵¹⁾ と記しており、館陶県から直隸へ向かうつもりだったと考えられる。だが援軍は李官荘を経て31日に臨清州城外へ到達し、ここに臨清攻防戦が始まった。

臨清は山東西北部の運河沿いにある要衝の地で、「漕船が西河を往来して絶えることなく、貨物が街角に溢れる」繁栄を誇っていた。また州城は1851年に大規模な修理工事が完

成して「堅実」「完固」であったため、附近の商人や住民が避難して「財貨や婦女を運び入れた」¹⁵²⁾という。ただし守備兵は少なく、紳士の率いる練勇 1,000 名余りも「城壁を守って助勢することが出来るだけで、出陣して戦うことは出来なかった」。知州張積功から救援の要請を受けた崇恩は手持ちの兵 900 名を率いて臨清に向かい、太平軍が到達する 1 日前の 3 月 30 日に州城外の南関に陣を敷いた。

はたして 31 日に太平軍はまず 4,000 人余りが二手に分かれて城北に攻撃をかけた。清軍が応戦すると「賊の勢いは少し弱まったが、後隊が続いて至り、わが兵は応援がないのに苦しんだ」「如何せん逆匪は人数の多さに恃んで退かず、その大隊は南関で質屋の更樓を占拠し、槍炮を放って我が兵を牽制した」とあるように、兵力の差に物を言わせて戦いを優位に進めた。この日清軍は太平軍の攻撃を押し返したが、崇恩は「賊の勢いが多すぎる」ために城外に駐屯することが出来ず、城内に引き上げた¹⁵³⁾。

4 月 1 日に北伐援軍は城内へ砲撃を加えながら、南門近くの地下にトンネルを掘った。翌 2 日朝に地雷が爆発し、月城と外城樓の部分が崩落した。太平軍は「隙に乗じて叫び声を上げ、登ろうとした」¹⁵⁴⁾が、都司武殿魁らに撃退された。だがこの時崇恩は城の遙か東北に善禄の軍を発見すると、「迎見」を口実に北門から脱出して夏津県城へ去った。絶望した張積功は井戸に身を投げたが、紳士たちに救い出されたという¹⁵⁵⁾。

さて張亮基は 4 月 3 日に練勇を率いて清平県の王家集へ到着し、5 日に臨清城東の八里荘に陣を敷いた¹⁵⁶⁾。また勝保は 3 月 31 日に 6,000 名の兵を率いて阜城県を出発し、4 月 5 日に臨清城北の劉家荘一带に布陣した。さらに善禄の軍は城の東北にある石槽荘に、城を脱出した崇恩の軍は善禄の陣地に近い張官屯にそれぞれ駐屯したが、「均しく逗留して進まず」¹⁵⁷⁾とあるように攻撃をかけなかった。勝保は次のように述べている。

賊衆は約二、三万人いるが、粵匪の数は一万に満たず、他に逆党に入った潰勇が四、五千人いて、李三闖が首領であるという。残りはみな安徽の捻匪で、粵匪によって集められてやって来た。この賊匪は豊工を渡ってから三隊に分かれ、張秋〔鎮〕で再び合流したが、千里を疾走して屢々城を陥落させるなど、勢いは甚だ兇悍である。しかも人数は数万となり、阜城の賊匪を救援すると言っており、急いで北へ向かおうとしている。これに対して私と善禄が率いる騎兵、歩兵は僅かに一万を超える程度で、衆寡をもって論じれば兵力は不足している。¹⁵⁸⁾

ここではまず北伐援軍の兵力が清軍を大きく上回り、清朝側が攻撃に慎重になっている様子が窺われる。勝保は 5 日に初めて交戦した直後の上奏でも「賊衆は約三、四万」としたうえで、「勢いは甚だ凶猛であり、戦闘経験のある兵でなければ殆ど防禦出来ない」と指摘した。また重要なのは、清朝側がこの太平軍の任務は北伐軍の救援にあり、その北進を阻まなければならないと考えていた点である。勝保は 5 日の上奏で「賊の意図は阜城の賊を救

援することにあり、もし真っ直ぐ阜城へ行けない場合は、別な道から迂回して畿輔へ至り、意を決して北犯するだろう」¹⁵⁹⁾と述べており、限られた兵力を臨清州城の救援よりも北進可能なルート警備に振り向けざるを得なかった。それだけに州城の東西南三面を占拠した北伐援軍が「木城を搭造」して長期戦の準備を始めたことは、清軍にとって意外であった。張亮基は「賊はすでに停留し、私の心はやや慰められた」¹⁶⁰⁾と語り、この太平軍部隊を殲滅する可能性が生まれたと分析している。

ただし当時臨清に派遣された清軍は、戦闘よりも略奪に熱心だった。先に陽穀県の救援に向かわなかった善祿の軍は、臨清でも「賊から一里余り離れた場所で槍炮を放って撤退した」とあるように真剣に戦わず、行軍中は「沿路劫掠」して、石槽荘に駐屯した後も「隣村はみな搜括」とあるように略奪をくり返した。これは崇恩や勝保の部隊も同じで、4月2日に夏津県城へ逃げ込んだ崇恩の兵は「質屋や店舗で掠奪をほしいままにした」¹⁶¹⁾という。また勝保の陣営には欽差大臣琦善の姪にあたる恭鉦という男がいた。彼の父親は腐敗した地方官だったが、彼も勝保の陣営に入ると「練勇の統率」に名を借りて私腹を肥やした。「(恭鉦は)村に入ると掠奪が盗賊よりも激しく、臨清河を守備していた時は客商が通るたびに密偵だと名指しして、荷車から手荷物まで全て没収し、自分の懐に入れた。このため軍中では彼を『公道大王』と呼んだ」¹⁶²⁾という。

さらに清軍陣営内で熾烈だったのは司令官たちの権力闘争と非難合戦だった。そのきっかけは張亮基が掠奪をして捕らえられた兵士を処刑したことで、他の將軍たちの反発を買った。また戦線に到着した勝保が報奨金5万両を出すように要求すると、張亮基は「上諭では各軍に妄りに褒美を出してはならぬとある。貴殿の兵はここへ至ってまだ一人の賊も殺していないのに、何をもって報奨と言われるのか？」¹⁶³⁾と問いただした。これに怒った勝保は「地方の文武は全て統制に従わねばならない」と主張し、張亮基に自分の陣地へ出頭するように厳命した。張亮基がこれを拒否すると、咸豊帝に対して彼が「軍務を玩視し、觀望して逗留している」「軍餉を籌撥して軍營へ送るように求めたが……、委員もやってこなければ返事一つもない」¹⁶⁴⁾と告発した。

これに対して張亮基は勝保が「功績を盗み過失を他人に負わせ、性情もねじけており、大いに兵民を失望させた」と述べたうえで、防備の手薄な城東にいる自分は「断じて該大臣が勝手な呼び出しに応じることは出来ない」と反論した。また勝保は他人が上奏することを嫌うが、それは「人を欺き、過ちを隠す」ための専横に外ならないと断じた¹⁶⁵⁾。だが勝保は張亮基が4月4日に黒家荘の太平軍陣地に夜襲をかけ、2,000名を殺害したと報じたのは事実無根であり、「功績を飾り立てることで少しでも責任逃れをしようと図った」¹⁶⁶⁾と追い打ちをかけた。結局4月10日に張亮基は「黒家荘の賊のいない場所に向かって空しく鎗炮を放ち、家々を焼いて賊二千余名を殺したと戦果を捏造した」¹⁶⁷⁾という罪状によって山東巡撫を解任され、流刑処分となった。それは僧格林沁に北伐軍征討の主役を奪われ、勝ち目の薄い臨清の戦いに臨まざるを得なかった勝保にしてみれば、すでに咸豊帝の信頼を失いつつあ

った張亮基をスケープゴートにすることで、自らの政治的影響力を守ろうとする必死の行動であったと考えられる。

このように司令官たちが反目し合っている状況では、臨清州城は守りきれぬものではなかった。4月9日に勝保は城北の林家園にある太平軍陣地を攻撃し、北面の包囲は緩和された。張集馨はこのチャンスに兵を北門外に移動させ、城内との連絡を確保するように崇恩に申し入れた¹⁶⁸⁾。すると10日に勝保は「北門から入城し、住民を安撫」すると共に、数百名の兵勇を増援として次々と入城させた¹⁶⁹⁾。だがこのうち四川勇は「城上にあつて賊と話をしていたが、城を守る者にはその隠語がわからなかった」¹⁷⁰⁾という。

4月11日に善禄と張亮基の軍は出撃し、太平軍と交戦した。善禄の軍はすぐに撤退したが、張亮基は追撃する太平軍に待ち伏せ攻撃を浴びせ、勝利して陣地に帰還した¹⁷¹⁾。だが翌12日朝に張亮基が再び出撃しようとする、彼の解任と取り調べを命じた北京からの上諭が届いた。これを知った「兵勇と郷民はみな痛哭した」¹⁷²⁾とある。

その夜太平軍は州城西南の城壁にしかけた地雷を爆発させた。馬振文『粵匪臨清紀略』によると城壁の一部が損傷しただけであったが、四川勇が「内応」して守備兵を殺したため城内は混乱に陥った¹⁷³⁾。陥落は必至と見た都司武殿魁は城内の倉庫と火薬庫を焼き払い、すでに負傷していた知州張積功と共に南門付近で自殺した¹⁷⁴⁾。翌13日に入城した太平軍は「大いに焚殺をほしいまま」にし、死者は16,000人に及んだ。

この日身柄を拘束された張亮基は勝保によって護送された¹⁷⁵⁾。だが臨清陥落の知らせが北京に届いた4月16日には勝保と善禄も解任処分を受け、罪を負ったまま州城を奪回するように命じられた¹⁷⁶⁾。そして勝保も咸豊帝の信頼を失っていくことになる。

3. 援軍の壊滅と北伐軍の敗走

(a) 阜城県における北伐軍と援軍の臨清撤退

北伐援軍が臨清州城へ到達した時、北伐軍本隊は阜城県にいた。東城村からの強引な行軍で大きな犠牲を出した北伐軍は、3月11日と13日に再び清軍の攻撃を受けた。11日に侍郎瑞麟らは県城の西南にある高家荘、宋家荘に攻撃をかけ、「家屋を焼き、賊をして占拠できない」ようにさせた。また西凌阿、副都統達洪阿は城南1キロの後康荘を襲い、ここに駐屯していた両広、湖広出身の「長髪の老賊」600名余りを殺した¹⁷⁷⁾。

続く13日に達洪阿らが県城西北の堆村、連村、杜家場を攻撃すると、太平軍は数百名から1,000名規模の部隊でそれぞれ抵抗を試みた。だが「わが兵は樹柵を引き開き、村内へ突入した」「兵勇を壁や屋根から一斉に進ませたところ、賊は慌て乱れ始めた」とあるように、陣地構築が間に合わなかったために清軍の進入を許し、堆村など3ヶ村は占領された。また村外で応戦した部隊も清軍に包囲され、指揮から旅帥まで14名の将校を含む3,000余名の死者を出して城内へ撤退した。この日の戦闘について僧格林沁は「賊の屍は枕を並べ、辺り一面隙間がない程だった」¹⁷⁸⁾と報じている。

相次ぐ敗北に北伐軍は「該逆の偽丞相三人は日夜泣き、賊衆は該逆の死党数千を除くほかは、怨嗟して心が離れない者はいない。現在は出ようとすれば殺され、守ろうとしても人心は固まらない」とあるように、林鳳祥ら司令官を初めとして動揺は大きかった。当初北伐軍は阜城県の周囲9ヶ村に陣地を置いて清軍を牽制しようとしたが、7ヶ村が清軍に奪われた。そこで塔児頭、紅葉屯については「鹿角や樹柵を五、六層にわたって敷きつめ、村を離れること一、二箭の遠さにある樹柵もみな鉄の鎖によって繋がれるなど甚だ堅固」¹⁷⁹⁾とあるように、僅かな時間に防禦力を強化した。また12日に阜城県へ到着した張集馨は「賊はすでに城外を焚掠し、城に入って守りを固めていた。阜城の北関は食糧が集まる場所であったが、賊は城内へ運び込んで勢いは益々盛んになった」¹⁸⁰⁾と述べており、北伐軍が当面必要な食糧を確保したことが窺われる。

これ以後北伐軍は「死守して出でず、密かに槍炮を放っている。数日以来、わが兵で死傷する者は二百余名で、いまだ撲入することが出来ない」¹⁸¹⁾とあるように、三度籠城する構えを見せた。その兵力について僧格林沁は「前後に捕らえた犯人の供述によればなお万余」¹⁸²⁾とあるように、少なくとも1万人以上が残っていたと述べている。だが阜城における北伐軍の占領地は狭く、城の造りは堅固だったものの身を隠せる建物は少なかった。また「水の溜まった場所が八、九割に及び、該逆はみな南関、東関に盤踞している」¹⁸³⁾とあるように、冠水によって使用可能な場所も限られていた。このため僧格林沁が「立て籠もった県城および附近の一、二の村莊は場所が狭く、東城等村の時と比べても包囲することは容易である」¹⁸⁴⁾と報じたように、清軍は優勢な兵力で包囲し、北伐軍陣地の回りに濠と木柵を築いて彼らの脱出を防いだ。

北伐援軍が黄河を渡ったという知らせが阜城県の清軍陣営に届いたのは3月19日であった。僧格林沁は善禄を山東の防衛へ向かわせたが、3月20日に清朝は勝保に德州へ向かうように命じた。また同時に僧格林沁に対して一日も早く阜城县城を奪回し、「醜類を悉く滅」¹⁸⁵⁾ぼして北伐軍と援軍を合流させないように指示した。3月23日に僧格林沁と勝保は阜城县城の東西から攻撃をかけたが、「わが兵は死を賭して木柵を引き倒そうとしたが、一層を開くだけで傷亡は十余人に及んだ」¹⁸⁶⁾とあるように、すでに強化されていた北伐軍の防禦線によって跳ね返された。また4月1日には取り寄せた大砲で紅葉屯を攻撃し、城内から出撃した北伐軍に打撃を与えたが、村を占領することは出来なかった¹⁸⁷⁾。

この頃臨清の救援に向かった清軍は1万1,000名にのぼり、阜城県に残された僧格林沁の軍は2万3,000名に減少していた¹⁸⁸⁾。また東城村からの追撃戦で威力を発揮した騎兵も「昼夜奔走して、途中飼い葉を探すことが難しかったため、倒れた馬はさらに多かった」「合計五、六千名のうち現在馬があるのは十分の四、五に過ぎない」¹⁸⁹⁾とあるように消耗が激しかった。もしこの時北伐軍が清軍の隙をついて南下していれば、或いは援軍との合流も可能であったかも知れない。

だが現実には北伐軍は阜城県から動かなかった。張集馨は林鳳祥らが臨清の曾立昌に手紙

を送り、救援は必要ないと述べて南への撤退を促したと述べているが、にわかには信じがたい¹⁹⁰。これに対して陳思伯は北伐軍首脳が援軍の臨清到達を知ったのは連鎖到着後の5月だったと記しており、彼らが援軍の動向を正確につかんでいなかった可能性は高い。また彼の凍傷が投薬と患部の切断によって回復したのは秋だったといい、少なくとも2度の行軍で負傷した将兵の多くは長距離の移動が不可能だったと推測される¹⁹¹。

加えて阜城の北伐軍にとって不幸だったのは春官副丞相吉文元の戦死であった。僧格林沁らの上奏によると、3月23日の戦闘で「大黄方旗」を掲げ、頭に黄色い風帽をかぶった「騎馬賊目」が姿を見せた。吉林兵が鉄砲と弓矢を放つと、吉文元の額と腰に数本が命中して即死させた¹⁹²。この時の模様について陳思伯は次のように述べている。

阜城には約二ヶ月駐屯したが、ある日偽春官副丞相の吉明遠（吉文元の誤り）が騎兵隊にいた藍頂花翎の官員と鉄砲の腕前を争った。吉明遠の使った火薬は賊営が作ったもので、硫黄が少なく力がなかった。発射音が同時に鳴り、吉の鉄砲がまさに発射しようとした時に、先に咽喉に弾が当たって死亡した。¹⁹³

これによると吉文元は清軍の将校と鉄砲の腕比べを行い、火薬の力不足で敗れたとある。戦場で太平軍将校が清軍将校と一騎打ちをしたという記録は他にもあり、南京郊外の七橋瓮で江南提督張国樑と武芸を競った国宗石祥楨（石達開の兄、一名鉄公鷄）は有名である¹⁹³。また後に捕らえられた李開芳は、北伐軍が火薬の原料となる硫黄を進撃先で入手したが、手に入らない時は酒で作ることもあり、その出来映えは良くなかったと述べている¹⁹⁴。太平軍では旗を掲げた丞相が陣頭に立って軍を率いたため、砲撃にさらされる危険も大きかったが、司令官の軽率な死は苦境にあった北伐軍にとって大きな痛手であった。回収された彼の遺体は阜城県衙門の後院に埋葬されたという¹⁹⁵。

いっぽう臨清を陥落させた北伐援軍はどうだろうか。4月12日に臨清府城へ入った援軍は、見せしめのために城内で清朝官員や男子に対する殺戮を行った¹⁹⁶。続いて食糧の搜索が行われたが、その掠奪と暴行の激しさは目に余るものがあった。曾立昌らは兵を城外に駐屯させようと図り、城内に東王楊秀清らの名義で「安民」の告示を出したが守られなかった¹⁹⁷。やむなく城内の女性、子供を城外へ出すように命じたが、門の両側には大勢の「賊匪」が立ち並び、通過する人々に容赦なく傷を負わせたという¹⁹⁸。

このような命令無視はそれまでの太平軍には殆ど見られなかったものだった。それは曾立昌らの統率力が失われつつあったことを示すものであり、北伐軍の救援という任務の遂行にとっても深刻な影響をもたらした。姚憲之は4月16日から22日にかけて清軍が城外の太平軍と戦い、勝利したと述べたうえで次のように記している。

賊がしばしば敗れたのは、臨清が破られた時に知州の張公（張積功）が食糧を一カ所

に集め、外側を火薬で囲んで、落城と共に悉くこれを焼いたため、賊は久しく留まることが難しくなったためだった。また新たに加わった鄆城、巨野一帯の捻、幅および各地の土匪は、金銀を腰にまとうと賊に従って戦うことを望まず、互いに密かに約束し、千百と群れをなして、隙に乗じて次々と逃げ出した。賊衆がこれを追いかけると、かえって傷つけられ、前後に敵を受けた。賊は北へ向かおうとしたが、官兵によって阻まれ、火薬や食糧も少なくなった。形勢が不利と見た偽丞相たちは密かに相談し、二十四日（4月21日）の夜に部隊を分けて城を出ると伝令を出した。¹⁹⁹⁾

ここからは臨清占領後の援軍が十分な食糧と火薬を獲得できなかったこと、掠奪で利益を得た新規参加者が離脱を試み、これを止めようとした太平軍との間に衝突が発生したこと、これらの困難の前に曾立昌らが北進に対する自信を失ったことが窺われる。

まず臨清城の陥落時に知州張積功が城内の食糧を焼却した事実については、勝保の上奏にも言及があり、「該逆は大いに失望した」と述べている。城内に残っていた火薬も僅かで、勝保は元々火薬を補給する予定でいたが、城が先に陥落してしまったという²⁰⁰⁾。

次に新規参加者の離脱について、張集馨は「諸賊は互いに下らず、それぞれが雄を争って、日に武器を手に取り、ついに闘志をなくした」とあるように、旧来の組織を温存していた新規参加者が勢力争いを始め、全体の士気が低下したと語っている。またそれらの兵について「この賊匪は逃亡兵、逃亡犯、銅船や糧船の漕ぎ手たちで、私塩販や捻匪が混じって群れをなしていた²⁰¹⁾」と述べており、反秩序的な人々が入り込んだために統制が効かなかったことを伝えている。さらに離脱を図った彼らとこれを引き止めようとした援軍将兵が衝突した点については、やはり勝保が清軍の戦果として指摘している。4月18日夜に臨清城の西南から「大股の賊匪」が脱出し、清軍が温涼社で待ち伏せ攻撃をかけたところ、「該匪は暗闇の中で相手を識別できず、互いに踏みつけあい、互いに殺し合って、焦った余り河に身を投げる者も数え切れなかった²⁰²⁾」という。

清軍の攻撃によって度々被害をうけた援軍首脳部は、「これより賊は北犯の意図がなくなった²⁰³⁾」とあるように引き続き北上する決心がつかなかった。黄生才は「二十二日（4月19日）に城を出て旧兄弟を救うために阜城へ行こうとしたが、官兵の人数が多く、恐れてあえて前進しなかった²⁰⁴⁾」と供述している。勝保も捕虜の供述から「賊は初め北京へ行こうと考えていたが、臨清城外に盤踞した者が官軍によってしばしば敗北したため、現在は州城を陥落させたものの、あえて真っ直ぐに北へ向かおうとはしていない²⁰⁵⁾」と述べており、援軍が数日間の戦闘で守勢に転じてしまったことがわかる。

4月21日夜から援軍は南へ向けて撤退を開始した（図2参照）。馬振文によると19日頃から太平軍陣地を守る将兵の数が減り、数日後に大胆な者が陣地へ盗みに入ると、残されていたのは多くが草の人形であった²⁰⁶⁾。援軍撤退後の23日に臨清城へ入った勝保は、太平軍よりも少ない兵で城を奪回できたのは「意計の外²⁰⁷⁾」だったと述べている。また彼の騎馬隊

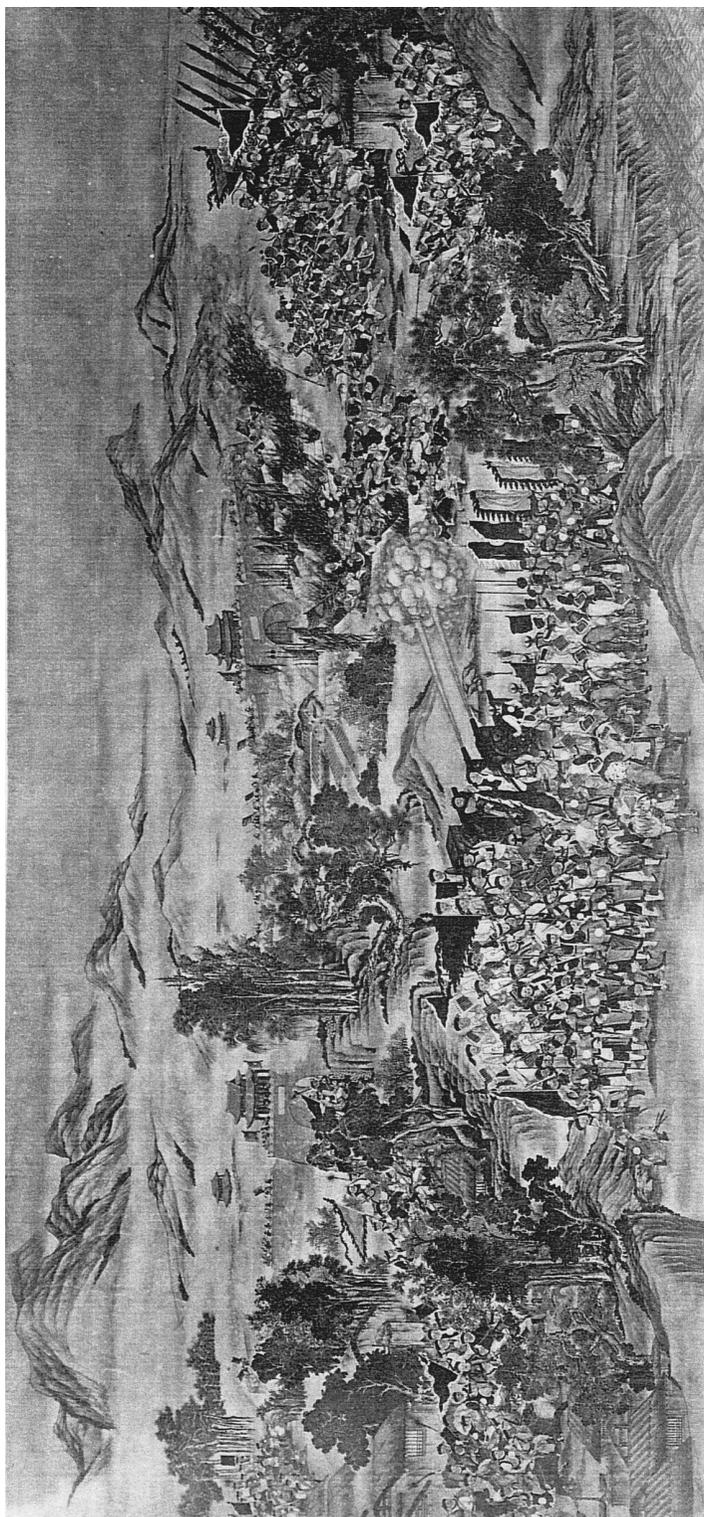


图2 克復臨青州城戰圖（「平定粵匪戰圖」冊3 東洋文庫所藏）

が1,000名程度と少なかったこともあって²⁰⁸⁾、北伐軍本隊が東城村からの撤退時に経験したような清軍の激しい追撃もなかったと考えられる。しかしこの行軍では「闇夜の中、脅されて従っていた者たちが紛々と逃げ出した」とあるように落伍者が続出した。また「軍中は号令が行われず、衆司馬も厳しい管束を行わず、脅された者たちが密かに逃げるのに任せた」²⁰⁹⁾とあるように軍は統率を欠き、将校たちも逃亡者を止めなかったという。

4月21日に援軍は李官荘へ到着した。この時援軍はなお2万人程度の兵力を擁していたが、「気力は萎え怖じ気づいて、隊をなすことが出来なかった」と戦闘意欲を失い、清軍数千名の攻撃に「あえて前進する志をもたず、村荘に屯聚することを謀って、さらに逃げ道を探そうとした」とあるように、村内にこもって反撃しなかった。また「脅されて従っていた者たちは、わが兵威によって潰えることを恐れて逃げ出す者が約千余人いた。みな自ら頭巾を取り、武器を捨てて、わが兵が追撃すると道端に跪き、哀れな声で救いを求めた」²¹⁰⁾とあるように、軍を離れて投降する者が続出した。

清軍が李官荘に対する砲撃を行うと、援軍は4月24日に清水集へ逃れた。ここでも数千名の死者および投降者を出すと、曾立昌らは事態を打開するため「南から来た老賊」に「先鋒砲」と呼ばれる火炎弾（火球）を持たせ、25日夜に清軍陣地へ攻撃をかけさせた。この夜襲は成功し、「官兵の陣屋に火を放ったところ、火が風に煽られ、たちまちの間に各陣地に延焼して、逃げまどう官兵の叫び声が響き渡った」²¹¹⁾という。勝保もこの戦いについて「(援軍は)密かに詭計を用い、長髪の賊党に髪を剃らせ、官軍の郷勇に化けさせた。二十九日(4月26日)の夜明け前に皆が眠っている隙をつき、火弾を発射して陣屋や車に打ち込んだ。すぐに火災が広がり、火葉数樽が爆発した」²¹²⁾と報じている。

姚憲之『粵匪滋擾南北紀略』によると、このとき曾立昌は「この機を逃さずに追い打ちをかければ、官兵を一網打尽にすることも難しくない。そしてここから軍を返して北上し、真っ直ぐに阜城へ向かえば、阻むものは決してない。敗北を勝利に変える好機なのだ」と力説し、全軍を再び北上させようとした。だが陳世保ら他の幹部たちはこれに同意せず、曾立昌も北進をあきらめざるを得なかったという。

これに先だって援軍内では4人の将校が軍令を誤って伝える事件が起こり、曾立昌らは彼らを死刑にしようとした。他の将校たちは彼らの罪を赦すように求めたが、曾立昌らは聞き入れなかった。すると「それぞれが大騒ぎをして解散しようとしたため、賊は人々の心が離れるのを恐れてこれを不問に付したが、軍令は益々行われなくなった」²¹³⁾とあるように、軍内は意見の対立から瓦解寸前になったという。もはや援軍は軍としての統一を保てなくなり、ここに北伐軍救援の試みは失敗に終わったのである。

(b) 援軍の壊滅と北伐軍の連鎮、高唐州到達

清水集で援軍の夜襲をうけた勝保は、4月27日に大砲で太平軍に反撃した。すると「該逆は身を隠すことができず、ついに初二日(4月28日)の丑刻に南へ向かって全股が奔竄

した」とあるように、援軍は再び南へ向けて撤退した。勝保は追撃を命じ、援軍が数キロにわたって展開しているところを捕捉して攻撃をかけた。援軍は「ついに大いに乱れ、互いに踏みつけあい、死体が散乱して、小部隊ごとに逃げ出した」「軍服を脱ぎ捨て、先に武器や旗幟を棄て、続いて鉄砲を放り出した」と混乱に陥り、小部隊ごとに10キロほど逃走して冠県城北の孝子哭村、化村、八里莊などに逃げ込んだ。清軍はこれらの村々を攻撃して5-6,000名を殺害し、数百名を投降させた。この時捕らえられた捕虜は「北犯の時は十五軍あったが、現在は屢々打撃を被って僅かに四軍を残すのみ」と供述しており、勝保も清水集撤退時に1万数千名いた援軍が6-7,000名まで減少したと報じている²¹⁴。

また敗走する援軍の前に立ちだかったのは各地のエリートが組織した団練であった。その一つ冠県王殿村の馬昌図が率いた団練は、3月に援軍が臨清へ進撃していた時には動かなかったが、援軍の退出後に横行した「土匪」の討伐に乗り出した。そして援軍が臨清から敗走してきたことを知ると、「自ら団丁を率いて截殺すること甚だ多かった」²¹⁵とあるように戦意を失った援軍部隊に襲いかかった。姚憲之は援軍が「清水鎮から冠県へ至ると、郷勇は賊が逃げ帰ってきたことを知り、各々武器を持って待ち伏せした。勝帥（勝保）がみずから騎兵を率いて追撃すると、前後から挟み撃ちにした。[援軍は]支えることができず、賊数千が殺され、逃散した者も少なくなかった」と述べている。

また姚憲之によると、相次ぐ敗戦に曾立昌は部下たちが自分の命令に従わず、休息を取ったために勝保に追撃の余裕を与え、挟み撃ちにあったことを恨んだ²¹⁶。だが武昌出身の將兵は曾立昌が先に逃亡したと考え、「みな怒って丞相を殺そうとした」²¹⁷という。この武昌出身の將兵は援軍が安慶で編制された時に加わった人々であり、中核部隊においても内紛が発生したことが窺われる。この時は黄生才のとりなしで事なきを得たが、その後曾立昌は自殺あるいは逃亡して行方不明になった。残された將兵も「それぞれ異心を懐いて、夜のうちに密かに約して髪を剃った」とあるように軍から離脱する意志を固め、5月2日に冠県から小部隊ごとに分かれて南への脱出を試みた²¹⁸。

その後援軍の残余は在籍侍衛田在田（山東巨野県人、のち総兵から督辦徐宿剿匪事宜提督銜として捻軍、苗沛霖軍の弾圧に参与した）が率いる団勇などに攻撃され、2-3,000人が江蘇の豊都城に逃げ込んだ²¹⁹。だが5月5日に勝保はこれを攻撃して壊滅的な打撃を与えた。彼は「この逆匪の存亡は実に南北の戦局にとって鍵となるものだった……。私たちは臨清に至ってから、一ヶ月程の間に勝利することと二十数回、捕らえ殺し、けちらした賊匪は四、五万人で……。広西の老賊および湖広などの省の兇悍な亡命の徒は、一律に殲滅しつくされた。広西の軍興以来、いまだこれほど迅速かつ痛快だったことはない」²²⁰と上奏し、北京へ戻って咸豊帝に謁見することを求めた。そして勝保は太子少保銜を与えられて降級留任の処分を回復され、一時的に咸豊帝の信頼を取り戻した²²¹。

この間北伐軍はどうしていたのだろうか。僧格林沁の上奏によると、阜城県の清軍は援軍が臨清を占領した直後に「賊壘の周囲に長い濠を掘」って北伐軍に対する包囲体制を整えた。

また清軍は屢々攻撃をかけたが、「該逆は溝の中に伏せて、これを誘っても出てこない」²²²⁾とあるように北伐軍は籠城して誘いに乗らなかった。この情況に変化があったのは4月23日のことで、4-5,000人の太平軍部隊が出撃し、待ち伏せしていた清軍によって2-300名が殺された²²³⁾。また清軍が連日砲撃を加えると、北伐軍は木の板やハシゴ、棉花などを集めて、清軍の掘った濠を埋めて阜城県から脱出しようと図った。4月27日に北伐軍は城南のバリケードを引き倒そうとしたが、清軍が仕掛けた地雷によって多くの死者を出した。翌28日には城北の濠を棉花で埋め、上から土を被せて突破しようとしたが、清軍の集中砲火を浴びて敗退した²²⁴⁾。

これらの事実は北伐軍が援軍と合流するために、阜城県からの脱出を試みていたことを伝えている。また「時に阜城の賊は数回難民や行商人を装った党羽を派遣し、手紙を携えて南から救援に来た賊を迎え探ろうとしたが、みな捕らえられて殺された。賊はまた女乞食や盲目の小唄謡いに命じて動静を探らせたが、見つかって殺された」²²⁵⁾とあるように、援軍の動向について情報収集を試みたが成功しなかった。

5月2日に北伐軍は強風に乗じて城の東南にいた侍衛培成の陣地に攻撃をかけ、「重濠を撲出」²²⁶⁾して包囲を突破した。そして5月5日に阜城県を撤退した北伐軍は二手に分かれ、一隊が清軍の追撃を阻み、もう一隊が阜城県の東南30キロにある連鎮を占領した²²⁷⁾。連鎮は大運河沿いの要衝で、「地方は富庶で蓄積が多く、久しく賊の覬覦するところ」²²⁸⁾と言われた経済の中心地であった。ここを占領した北伐軍はまず「糧食は充足」とあるように食糧問題を解決した。また運河の東西両岸に広がる市街に浮き橋をかけて往来を可能にし、付近1キロほどの村々を占拠して防禦の体制を固めた²²⁹⁾。

北伐軍の阜城脱出の知らせを受けた咸豊帝は「実に痛恨」と述べたうえで、北伐軍が德州一帯を経由して「南来の賊と勾結」しようとしていると指摘した。また失態の原因を強風に求めた僧格林沁を「束手無策」と批判して追撃を命じると共に、勝保と崇恩に対して急ぎ援軍の残余を殲滅して「北路の竄匪を堵截」²³⁰⁾するように指示した。

実のところ清軍は運河を渡る船を確保できず、僧格林沁と西凌阿は東光県を経由して5月9日に連鎮の河東へ、托明阿は河西へそれぞれ到着した²³¹⁾。このとき北伐軍はすでに迎撃体制を整えており、5月15日には1,000名余りの兵力で僧格林沁の陣地を攻撃した²³²⁾。また援軍の掃蕩を終えた勝保は5月19日に騎兵を率いて連鎮の南に到着したが、「官兵は分撥に足りず、やや空虚」²³³⁾とあるように包囲網を形成することは出来なかった。

当時北伐軍はなお7,000名余りの兵力を擁していたが、清軍に捕らえられた捕虜が「逆衆は臨清へ逃げようとしたが、馬隊の追撃が厳しいのを恐れて連鎮を占拠した。ここに盤踞するののか、それとも他へ向かうかについては定まっていない」²³⁴⁾と供述したように、そのまま全軍で南進を続けるだけの余力を持っていなかった。そして清軍の反応が鈍いを見た李開芳は、5月27日夜に一隊を率いて南へ向かった。その経緯について陳思伯は次のように述べている。

四月末に河間府属の連鎮に陣地を移した。林逆（林鳳祥）は密偵だった各省の言葉を操る広東の婦人が送ってきた手紙を受け取り、ようやく南京が十三軍を続けて派遣し、すでに山東臨清州に来ていることを知った。そこで偽地官丞相の李開芳に一千の騎兵を率いて迎えに行かせた。陣地で優秀な將兵を選び、「先鋒」と名づけ……、早い馬一千匹と共に李逆に連れて行かせたのである。ついで臨清の（清軍）兵力が多く、陣地も固くて入城できなかったため、この馬賊は進退窮まって山東高唐州へ立て籠もったと聞いた。²³⁵⁾

これによると林鳳祥は援軍が臨清州へ到達したことを知り、急ぎ李開芳を迎えに行かせたとある。また5月26日に勝保が送った上奏は「逆賊は連鎮の東西に木城を築き、布置は周到である。捕らえた奸細の供述では、最近ようやく救援の大軍がすでに官兵に剿平されたとの知らせを得た。該逆は甚だ慌て、急ぎ逃げ出そうとしたが、あえて行動に移さず、しばらく堅固死守することにしたという」²³⁶⁾と述べており、援軍の敗北についてもある程度の情報が入っていたようである。

さらに李開芳は「私は連鎮にいた時に林鳳祥と相談し、別に官兵を牽制できる場所を選んで、互いに応援する態勢を作るべきだと考えた。そこで人を遣わして四方を探らせたところ、東南の一路は空虚であり、密かに進出することが可能だと知った。林鳳祥の意図は連鎮で救援を待つことにあり、私に囲みを破って外に出ることを望んだ……。そこで私は六百三十人ほどを率いて、ひそかに馬で連鎮の東南から出かけたのである」²³⁷⁾と供述している。北伐軍が独流鎮、静海県の戦いと同じく、軍を分けることで清軍の重圧を減らそうと考えていたことが窺われる。

だが結局のところ李開芳は援軍を迎えるという任務を達成できなかった。5月31日に捕らえられた太平軍の密偵である杜有仲（済寧州人）は次のように供述している。

初二日（5月28日）の夜明け前に逆賊林姓（李開芳の誤り）に従って連鎮を抜け出し、まず東へ、続いて西南さらに南へ向かった。そして百里余りも回り道をしてある村へ至ったところ、臨清の一股はすでに殲滅されて尽きたことを知った。そこで賊目は彼に命じて変装して秘かに連鎮へ戻り、賊目の金姓らにこれ以上援軍を待たず、即刻南へ出発するように促す手紙を託した。²³⁸⁾

ここからは李開芳らが50キロ近く南下したところで援軍壊滅の事実を知り、急ぎ連鎮の本隊に援軍を待つことなく、南へ軍を移すように促そうとしたことがわかる。また勝保の上奏によると、李開芳は援軍が壊滅したとの情報を信じられず、これと連絡をつけよう連鎮を出発した。だが「高唐州へついた後、初めて臨清へ送られた賊が本当に官兵に剿殺されて存在しないことを知った。そこで彼（杜有仲）に連鎮へ秘かに赴き、衆賊に『南へ逃れて生き

延びよ、困守してはならない』と知らせようとした」²³⁹⁾という。少なくとも北伐軍が援軍の壊滅を確認したのは林鳳祥が連鎮、李開芳が山東高唐州に分かれて駐屯した時のことだったと考えられる。それは北伐軍にとって苛酷な現実であったと言えよう。

小 結

本稿の内容をまとめると以下ようになる。独流鎮、静海県で籠城を続けていた北伐軍は、1854年1月末に西南へ向けて移動を開始した。勝保はそれを「敗走」即ち自分が北伐軍を追いつめた戦果であると報じたが、当時の北伐軍は清軍の砲撃に苦しんだものの、深刻な食糧不足に陥っていた訳ではなかった。むしろ林鳳祥らは湖面の凍結したこの時期を利用して、保定方面から北京へ向かう道を模索していた。だが厳寒の行軍は北伐軍将兵にとって大きな負担となり、凍死したり、凍傷となる者が続出した。

東城村へ移動した北伐軍は追撃してきた僧格林沁の軍と対峙したが、3月に再び南へ向けて移動を始めた。しかしこの時は雪融けの時期に当たり、負傷していた多くの将兵は泥沼に足を取られて進むことが出来なかった。だが林鳳祥らは清軍に気づかれるのを防ぐために、助けを求める部下を殺して撤退を続けた。取り残された北伐軍将兵は僧格林沁軍によって殺され、阜城県郊外にたどり着いた部隊も清軍の急襲を受けて混乱に陥った。つまり北伐軍の東城村からの撤退は「敗走」であったが、それは通説のごとく冬将軍に敗れたというよりは、「雪融けの泥」に敗れた結果であった。

北伐軍がまだ独流鎮、静海県にいた1854年1月に、太平天国首脳はようやく援軍派遣の準備にとりかかった。楊秀清は揚州にいた曾立昌を呼び戻し、安慶で新たに部隊を編制させた。こうして組織された北伐援軍は2月に安慶を出発したが、その規模は数千人で、湖北一帯で参加した新兵が少なくなかった。このように戦力の劣る部隊を送り出した原因は、当時安徽、湖北で戦線が拡大して戦力に余裕がなかったことに加え、北伐救援軍の派遣に対して消極的だった幹部たち（後の反楊秀清派）の意向があった。

安慶を出発した援軍の進撃は早く、3月初めに安徽北部の蒙城県を占領し、中旬には黄河を渡河して山東へ入った。この急速な進撃を可能にしたのは各地の呼応勢力とくに前年厳しい弾圧を受けた捻子の活動であった。北伐援軍に加わった新規参加者は大量かつ性質が複雑で、揚州で太平軍に敗北した「逃勇」の李三閘や太平順天王を名乗った張捷三などかなりの軍事力を擁した地方の反体制勢力が混じっていた。これに対して援軍は進撃のスピードが速く、中核部隊の人数が少なかったために、彼らの組織を解体して個別に部隊へ編入するだけの余裕をもたなかった。それは結果として新規参加者を統率できず、作戦の遂行に致命的な影響をもたらした。

はじめ北伐援軍は直隸保定をめざし、ここで北伐軍と合流して北京へ向かう予定をたてていた。だが3月末に山東西北部の冠県を陥落させると、東へ進路をかえて運河の要衝である臨清州を攻撃した。清朝は阜城県にいた清軍部隊の一部を引き抜いて勝保の統率のもと臨

清救援に向かわせたが、数万の北伐援軍を相手に勝ち目はないと見た勝保は山東巡撫の張亮基を告発することで責任逃れを図った。このように清軍司令官が反目しあう中で4月に臨清州城は援軍の手に落ちた。

このとき北伐軍本隊が時機を逃さず南へ移動していれば、援軍との合流は可能だったかも知れない。だが彼らは阜城県城で籠城を続け、兵力の減少した清軍の包囲網を突破しようとはしなかった。その原因として林鳳祥らが援軍の動向を正確につかんでいなかったこと、2度の苛酷な行軍で負傷した將兵に移動する余裕がなかったことが挙げられる。さらに籠城中に丞相吉文元が軽率な戦いで死亡したのも痛手だったと考えられる。

いっぽう臨清を占領した援軍は、新規参加者の激しい掠奪を止めることが出来なかった。また十分な戦利品を獲得した彼らは、もはや援軍に従うことを望まず、軍を離脱しようと試みた。この混乱に援軍が引き続き北進する意欲を失い、南への撤退を始めると、逃亡兵はさらに増えて軍としての統制を保てなくなった。曾立昌は清水集で決死隊に清軍陣營を攻撃させ、その勝利に乗じて再び北上するように主張したが、部下たちは従わなかった。古参兵の間でも司令官への不満が表面化した援軍は、江蘇豊県まで退いたところで清軍、郷勇にほぼ殲滅され、ここに北伐軍の救援作戦は失敗に終わった。

4月下旬に北伐軍は阜城県からの脱出を図り、5月初めに連鎮へ到達した。ここでようやく援軍が臨清州へ到達したと知った林鳳祥は、急ぎ李開芳を南へ50キロ離れた高唐州へ派遣した。だがこの時援軍の姿はすでになく、その壊滅を知った李開芳は連鎮の林鳳祥へ急ぎ南進するように促した。だが以後二つの部隊は再び合流できず、清軍の兵力を分散させながら籠城戦を続けることになったのである。

上記の事実は、北伐の敗北ひいては太平天国の失敗について重要な示唆を与えてくれる。まず確実に言えるのは援軍派遣のタイミングが遅すぎたということであり、「天津についたら報告せよ。さすれば援軍を送る」²⁴⁰⁾と取り決めた当初の作戦計画が杜撰であったことは否定できない。また本稿は北伐軍が援軍の動向を把握できなかったことを指摘したが、太平軍將兵にとって清朝の統治が堅固で風俗、習慣が南方と異なる華北での連絡や情報収集は想像以上に困難だったことが窺われる。

さらに本稿で明らかになった太平天国の課題とは、自立性の高い反体制勢力を味方につけることの弊害であった。とくに自分たちの兵力が少なく、大量の新規参加者を抱え込んだ場合、彼らの組織を解体して訓練を施すことができず、結果として軍の統制と規律の維持が難しくなった。むろん兵力の増強それ自体は必要なことであり、援軍が臨清へ到達できたのは新規参加者の力量に負うところが大きかった。だが彼らが掠奪や暴行という形で爆発させた負のエネルギーは住民の反発を招いたばかりか、彼らは一度目的が達せられると離反を図り、援軍はその動きに足を取られて本来の任務を達成できなくなった。

すでに別稿で見たように、我々は同様の事例として天地会と共同作戦を展開したために鬱林州攻撃に執着し、金田の太平軍本隊との合流に失敗した凌十八蜂起軍を知っている²⁴¹⁾。

だが今回の北伐援軍による失敗の経験も、その後の太平天国において生かされなかった。むしろ清軍との間に消耗戦が続くにつれて、太平天国が反体制的な地方軍事集団と連携する傾向は強まり、その組織を温存させたために同じ過ちがくり返された²⁴²⁾。その意味では北伐援軍の壊滅は、その後の太平天国の運命を暗示するものだったといえよう。

援軍との合流に失敗し、絶望の中で籠城を続けた北伐軍の最後については、別の機会に詳述することにした。

註

- 1) 菊池秀明「太平天国の北伐前期における諸問題 南京から懷慶まで」国際基督教大学社会科学研究所編『社会科学ジャーナル』55号、2005年。
- 2) 菊池秀明「太平天国の北伐中期における諸問題 山西から天津郊外まで」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』33号、2006年。
- 3) 簡又文『太平天国全史』第九章、北伐軍戦史、香港猛進書屋、1962年、557頁。
- 4) 張守常『太平天国北伐史』（張守常・朱哲芳『太平天国北伐・西征史』広西人民出版社、1997年所収）。張守常『太平軍北伐叢稿』齊魯書社、1999年。
- 5) 崔之清等編『太平天国戦争全史』2、戦略発展、南京大学出版社、2002年。
- 6) 堀田伊八郎「太平天国の北征軍について その問題点の一考察」『東洋史研究』36巻1号、1977年。
- 7) 中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』（以下『鎮圧』と略記）第6-17輯、1992-1995年が太平天国の北伐と直接関連している。
- 8) 中国社会科学院近代史研究所主編、張守常編『太平軍北伐資料選編』齊魯書社、1984年。
- 9) 勝保奏、咸豊三年十一月二十八日『鎮圧』11、363頁。
- 10) 勝保奏、咸豊三年十二月初七日『鎮圧』11、447頁。
- 11) 勝保奏、咸豊三年十二月十三日『鎮圧』11、518頁。この要請を受けて崇恩が静海へ向かったのは1月14日のことで、24日には静海城南の三里莊に到着した（崇恩奏、咸豊三年十二月十五日・二十四日、同書553頁および同12、12頁）。
- 12) 勝保奏、咸豊三年十二月初三日『鎮圧』11、408頁。また彼は十一月二十八日の上奏でも「賊營塩糧甚欠、毎日餐粥二次、不能裹腹、現在油燭全無。両湖賊匪亦漸離心、亟思逃遁、四路打探有兵、不敢衝出」と述べている（同書363頁）。
- 13) 勝保奏、咸豊三年十二月十三日『鎮圧』11、599頁。
- 14) 勝保奏、咸豊三年十二月十三日『鎮圧』11、518頁。
- 15) 軍機大臣、咸豊三年十一月二十八日『鎮圧』11、355頁。
- 16) 僧格林沁奏、咸豊三年十二月十六日『鎮圧』11、566頁。
- 17) 王自發供詞、咸豊四年正月初六日『鎮圧』12、186頁。
- 18) 勝保奏、咸豊三年十二月十三日『鎮圧』11、518頁。
- 19) 勝保奏、咸豊三年十二月三十日『鎮圧』12、130頁。
- 20) 僧格林沁奏、咸豊三年十二月二十六日『鎮圧』12、77頁。
- 21) 僧格林沁奏、咸豊三年十二月十六日『鎮圧』11、566頁。王自發の供述に「聽説独流打仗、我們得了三千余斤大砲三個、五百余斤大砲五個、擡鎗二十余桿、手槍七八十桿、未放狄火箭六隻」と

- ある（『鎮圧』12、186頁）。また張興保は北伐軍が「守城用大砲、打仗不用大砲」であると述べており（『鎮圧』12、142頁）、これらの大砲の多くは清軍から奪ったものであったと考えられる。
- 22) 勝保奏、咸豊三年十一月二十四日『鎮圧』11、317頁。
 - 23) 勝保奏、咸豊三年十二月初三日『鎮圧』11、408頁。
 - 24) 丁運枢等編「防剿粵匪」（中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯室主編、張守常編『太平軍北伐資料選編』齊魯書社、1984年、480頁）。
 - 25) 僧格林沁奏、咸豊三年十二月十六日『鎮圧』11、566頁。
 - 26) 勝保奏、咸豊三年十二月初七日『鎮圧』11、451頁。
 - 27) 勝保奏、咸豊三年十二月三十日『鎮圧』12、128頁。
 - 28) 張興保供詞、咸豊三年十二月下旬『鎮圧』12、142頁。なおそれによると、1万人の中に広西人は1-200人、湖南人2-300人であったという。
 - 29) 勝保奏、咸豊三年十二月三十日『鎮圧』12、128頁。
 - 30) 陳思伯『復生録』（羅爾綱・王慶成主編『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、広西師範大学出版社、2005年、347頁）。
 - 31) 勝保奏、咸豊三年十二月三十日『鎮圧』12、132頁。
 - 32) 僧格林沁奏、咸豊四年正月初一日『鎮圧』12、144頁。
 - 33) 勝保等奏、咸豊三年十二月二十三日『鎮圧』12、3頁に「該逆自十七、十八日兩次受創之後、欲阻我兵進攻紫營、復又決堤放水、葡萄窪一帶漫溢甚寬、新築營盤水已數寸」とある。また清軍も「伝令於靜海上游西岸決堤放水、灌入下西河、又派員至靜海東岸相度地勢、挖決堤堰、使水注東南、既可杜其竄路、又可殺其水勢」とあり、双方が堤防を決壊したために冠水した地域が広がった様子が窺われる。河南学政張之萬も「該逆因防我兵進攻、已將靜海之南運河決放、水直東下、我兵大營隔靜海數里、其間皆爲泥淖」と述べている（咸豊四年正月初四日、同書176頁）。
 - 34) 勝保奏、咸豊四年正月初三日『鎮圧』12、163頁。
 - 35) 王自發供詞、咸豊四年正月初六日『鎮圧』12、186頁。
 - 36) 勝保奏、咸豊四年正月初三日『鎮圧』12、165、166頁。
 - 37) 軍機大臣、咸豊四年正月初三日『鎮圧』12、172頁。
 - 38) 勝保等奏、咸豊四年正月初九日『鎮圧』12、231頁。また僧格林沁の兵力については僧格林沁奏、咸豊四年正月初五日、同書182頁。
 - 39) 軍機大臣、咸豊四年正月初十日『鎮圧』12、240頁。
 - 40) 勝保奏、咸豊四年正月初九日『鎮圧』12、229頁。
 - 41) 陳思伯『復生録』（『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、347頁）。
 - 42) 勝保奏、咸豊四年正月初十日『鎮圧』12、240頁。
 - 43) 文瑞等奏、咸豊四年正月十五日『鎮圧』12、276頁。
 - 44) 僧格林沁奏、咸豊四年正月十二日『鎮圧』12、252頁。
 - 45) 僧格林沁奏、咸豊四年正月十二日『鎮圧』12、254頁。
 - 46) 僧格林沁奏、咸豊四年正月二十日『鎮圧』12、310頁。
 - 47) 僧格林沁奏、咸豊四年正月十二日『鎮圧』12、254頁。
 - 48) 僧格林沁奏、咸豊四年正月十二日『鎮圧』12、252頁。
 - 49) 僧格林沁奏、咸豊四年正月十三日『鎮圧』12、267頁。
 - 50) 軍機大臣、咸豊四年正月十四日『鎮圧』12、271頁。德勒克色楞奏、咸豊四年正月十四日・同十六日、同書273、290頁。

- 51) 僧格林沁奏、咸豊四年正月十二日『鎮庄』12、254頁。また僧格林沁は正月二十五日の上奏でも「此間地勢平坦、糧草無多、非独流、静海可比、該逆斷不能負嶠久踞」と述べている（同書365頁）。
- 52) 僧格林沁奏、咸豊四年正月十六日『鎮庄』12、289頁。
- 53) 僧格林沁奏、咸豊四年正月二十日『鎮庄』12、311頁。また勝保も東南方面を視察した帰りに食糧調達に出ていた北伐軍数百名と遭遇し、これを攻撃して100名余りを殺したと報じている（僧格林沁等奏、咸豊四年正月二十五日、同書365頁）。
- 54) 張集馨『道咸宦海見聞録』中華書局、1981年、140頁。
- 55) 僧格林沁奏、咸豊四年正月二十日『鎮庄』12、310頁。
- 56) 張集馨『道咸宦海見聞録』中華書局、1981年、141頁。
- 57) 齊承彦奏、咸豊四年二月初二日『鎮庄』12、396頁。
- 58) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、348頁。
- 59) 僧格林沁奏、咸豊四年正月二十八日『鎮庄』12、380頁。
- 60) 僧格林沁奏、咸豊四年二月初二日『鎮庄』12、397頁。
- 61) 張集馨『道咸宦海見聞録』中華書局、1981年、138頁。
- 62) 僧格林沁奏、咸豊四年二月初七日『鎮庄』12、437頁。
- 63) 僧格林沁奏、咸豊四年二月初二日『鎮庄』12、397頁。また同奏、咸豊四年正月二十八日、同書380頁も「查該逆情形、糧草將盡、欲守不能、欲戰不敢。經我兵四面圍剿、窮極思奔」と述べている。
- 64) 僧格林沁奏、咸豊四年二月初七日『鎮庄』12、437頁。
- 65) 張集馨『道咸宦海見聞録』141頁。
- 66) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、348頁。
- 67) 僧格林沁奏、咸豊四年二月十二日『鎮庄』12、495頁。
- 68) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、348頁。
- 69) 僧格林沁奏、咸豊四年二月十二日『鎮庄』12、495頁。
- 70) 僧格林沁奏、咸豊四年二月十一日『鎮庄』12、470頁。
- 71) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、348頁。
- 72) 僧格林沁奏、咸豊四年二月十五日『鎮庄』12、516頁。
- 73) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、348頁。
- 74) 曾立昌は広西潯州人で、謝介鶴『金陵癸甲紀事略』附、粵逆名目略には「自揚州回金陵、東賊使竄河北、至黄河爲大兵所撓敗、入水死」とある（中国近代史資料叢刊『太平天国』4、神州国光社、1952年、673頁）また、張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下には「先踞揚州府、後犯直隸、山東、被官兵所戮」とある（『太平天国』3、72頁）。
- 75) 陳世保の出身地は不明で、援軍を指揮した3人のうち「以陳世保最爲強悍、逆衆素所畏服」であったという（勝保奏、咸豊四年四月十一日『鎮庄』13、601頁）。
- 76) 許宗揚は広西の出身で、1853年に石達開に従って安徽へ入り、やがて南京へ呼び戻された。1854年に冬官又副丞相となって「率羣賊犯山東、直隸一帶、七月敗回江寧、收入東牢」とある（張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、『太平天国』3、62頁）。
- 77) 張守常「太平天国北伐援軍軍数人数考—太平天国北伐軍軍数人数考続篇」『太平軍北伐叢稿』188頁。また簡又文氏は15軍、人数は未詳だが、正規軍の軍帥が一万人以上を統括したのとは異なる

ると述べている（簡又文『太平天国全史』第九章、北伐軍戦史、627頁）。

- 78) 張守常「『黄生才供詞』和『粵匪南北滋擾紀略』」『太平軍北伐叢稿』309頁。なお黄生才の供詞は中国史学会済南分会編『山東近代史資料』1、山東人民出版社、1957年、6頁所収で、取り調べを行った山東曹州府の官吏の手でかなりの脚色を加えられている。例えば供述書によると彼は広西永安州人とあるが、勝保は「拏獲逆匪偽総制黄生才一名、訊供係湖南衡州府人、咸豊二年被裹入夥」（勝保奏、咸豊四年七月十九日『鎮圧』15、70頁）と述べており、こちらの方が実態に即していると思われる。ただし黄生才が北伐援軍の將校だったことは間違いなく、また道光年間に「結拜兄弟」をしたという供述内容から見て、1852年に湖南で太平軍に参加した天地会員だったと推測される。
- 79) 張大其供詞、咸豊四年三月十二日『鎮圧』13、204頁。また『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』3、289頁。また黄生才も援軍の規模について「十五軍」としたうえで、左一、右六、左三、右十、前一、前二、前九、前十、中一、中三、中四、後一、後七、後九軍の14軍を挙げている（『山東近代史資料』1、14頁）。
- 80) 琦善奏、咸豊三年十一月二十六日『鎮圧』11、375頁。
- 81) 菊池秀明「太平天国の北伐中期における諸問題 山西から天津郊外まで」。
- 82) 菊池秀明「太平天国西征軍の湖北進出と廬州攻略」（未発表）。
- 83) 黄生才供詞、『山東近代史資料』1、10頁。また謝介鶴『金陵癸甲紀事略』附、粵逆名目略によると、楊秀清は石達開が安徽で「東賊の苛制」を改めて人々の支持を集めると、不安になって秦日綱と交代させたとある（『太平天国』4、670頁）。
- 84) 張德堅『賊情彙纂』巻1、劇賊姓名上、秦日綱に「（甲寅四月）楊賊再令北犯、日綱往擾鳳陽、廬州一帶、不願北行、稟奏楊賊云：北路官軍甚多、兵单難往。統奉偽旨、仍往安徽撫民」とあり、彼が北伐軍救援に消極的だったと伝えている（『太平天国』3、50頁）。
- 85) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、83頁。
- 86) 張大其供詞。また袁甲三奏、咸豊四年二月二十日は捕らえた密偵や難民の供述として「去歲十一月自揚州竄出、益以南京之賊、不滿万人」と報じている（『鎮圧』12、574頁）。
- 87) 福濟等奏、咸豊四年正月二十九日『鎮圧』12、391頁。
- 88) 福濟奏、咸豊四年二月初八日『鎮圧』12、454頁。
- 89) 袁甲三奏、咸豊四年二月初七日『鎮圧』12、441頁。
- 90) 百勝等奏、咸豊四年二月十二日『鎮圧』12、501頁。
- 91) 福濟奏、咸豊四年二月十一日『鎮圧』12、477頁。
- 92) 李嘉端等奏、咸豊三年八月十九日『宮中檔咸豊朝奏摺』10、11頁、台北国立故宮博物院蔵。
- 93) 袁甲三奏、咸豊四年二月初七日『鎮圧』12、441頁。
- 94) 袁甲三奏、咸豊四年二月十一日『鎮圧』12、480頁。
- 95) 佚名『山東軍輿紀略』巻17上、幅匪一（中国近代史資料叢刊『捻軍』4、神州国光社、1953年、332頁）。
- 96) 曹藍田「癸丑會試紀行」（太平天国歴史博物館編『太平天国資料叢編簡輯』2、中華書局、1962年、319頁）。
- 97) 李嘉端奏、咸豊三年三月初二日『宮中檔咸豊朝奏摺』7、408頁。
- 98) 民国『渦陽県志』巻15、兵事（『捻軍』2、99頁）。
- 99) 陸應穀奏、咸豊三年九月初一日『宮中檔咸豊朝奏摺』10、212頁。

- 100) 周天爵奏、咸豊三年七月十四日、農民運動類・捻軍項 8328-12 号、中国第一歴史檔案館蔵。この内李月については援軍の黄河渡河後に永城県で活動していた（袁甲三奏、咸豊四年三月初四日『鎮庄』13、109 頁）。
- 101) 周天爵奏、咸豊三年八月初三日、農民運動類・捻軍項 8368-16 号。
- 102) 袁甲三奏、咸豊三年九月二十九日『宮中檔咸豊朝奏摺』10、622 頁。
- 103) 袁甲三奏、咸豊三年十月十二日『宮中檔咸豊朝奏摺』10、777 頁。
- 104) 劉利害供詞、咸豊四年正月十八日、農民運動類・捻軍項 8345-38 号。
- 105) 袁甲三奏、咸豊三年十二月二十七日『鎮庄』12、96 頁。また「法良致瑛榮函」によると李三閻は泗州高興集に戻ると「連日演戲招匪、打造軍器。最可嘆者、該罪戴三品頂戴、自称李三大、匪目皆戴白頂金頂。兩旬已聚有二千余人」とある（『瑛蘭坡藏名人尺牘墨迹』108 冊、第 3 信、『太平軍北伐資料選編』231 頁）。なお『山東近代史資料』1、捻軍部分の座談会記録によると李三閻は本名を李曇云といい、徐州睢寧県の出身で、満洲人である欽差大臣琦善が漢人參將の馮景尼を処刑したことに不満を持って離反したという（李季華談、232 頁）。
- 106) 袁甲三奏、咸豊四年正月十七日『端敏公集』卷 3。
- 107) 袁甲三奏、咸豊四年三月十七日『鎮庄』13、291 頁。
- 108) 佚名『山東軍興紀略』卷 1 之中、粵匪二（『捻軍』4、11 頁）。
- 109) 張捷三について民国『渦陽県志』卷 15、兵事は「教匪」、光緒『亳州志』卷 8、武備志およびこれを引用した光緒『安徽通志』は「捻匪」としている。また郭豫明『捻軍史』上海人民出版社、2001 年、129 頁は張捷三が亳州一帯で活動していたことから、捻子説の確度が高いと述べている。もっともこの時期華北の反体制勢力は多様な性格を併せ持つ傾向を見せており、簡単にどちらか断定はできない。なお袁甲三は(110)の上奏で張捷三を「捻匪」と呼んでいる。
- 110) 袁甲三奏、咸豊四年三月十七日『鎮庄』13、288 頁。
- 111) 光緒『永城県志』卷 15、災異志（『捻軍』4、18 頁）。また夏邑県占領の期日については楊以増奏、咸豊四年三月十七日『鎮庄』12、543 頁。
- 112) 袁甲三奏、咸豊四年二月十一日『鎮庄』12、480 頁。この時劉瀛階らは太平軍の前衛部隊が退出後、県城に入って「安撫居民」しているところを「後股逆匪」の攻撃を受けたという。
- 113) 民国『夏邑県志』卷 9、兵事（『捻軍』3、26 頁）。なおこの時知県徐本立も殺されたが、「苗協鎮」の率いる清軍は「認係長毛領隊、徑去」とあるように逃亡した。
- 114) 同治『徐州府志』卷 22 中之上、人物伝、忠節。
- 115) 楊以増奏、咸豊四年二月十七日『鎮庄』12、543 頁。この時期の援軍の人数は記載によってまちまちで、張之万は「安徽渡河之賊、約不過六、七千人、其李三閻、陳長泗等捻匪俱在其内。至河北裏魯現時已逾万人」（同奏、咸豊四年二月二十九日、『鎮庄』13、39 頁）と数千人と見積もっている。また楊以増は「次日（3 月 10 日）大股逆匪踵至、約三、四万人、見豊工以下黄河乾涸、即屯踞各村莊」（同奏、咸豊四年二月二十日『鎮庄』12、577 頁）とあるように 3-4 万人という数を挙げている。さらに徐州道王夢齡は瑛榮に宛てた書簡で「一路掠來有五万余人」（『瑛蘭坡藏名人尺牘墨迹』76 冊、第 2 信、『太平軍北伐資料選編』234 頁）と述べているが、これは過大であろう。新規加入の反乱勢力をどこまで含めるかで違いが生まれたと見られるが、実際に渡河したのは 2 万人を超えなかったと考えられる。
- 116) 袁甲三奏、咸豊四年二月二十日『鎮庄』12、572 頁。
- 117) 英桂奏、咸豊四年二月三十日『鎮庄』13、49 頁。同治『徐州府志』卷 5 下、紀事表。また援軍

- の渡河後に豊工口に到着した百勝は、援軍が渡河地点に土城を築き、住民に後続部隊の到着まで「拆棄」することを禁じたと報じている（百勝等奏、咸豊四年二月二十五日、『鎮圧』12、647頁）。
- 118) 張大其供詞。この許宗揚の部隊については、袁甲三奏、咸豊四年三月初四日に「逃回永城逆匪約有三千余人、意欲仍帰六安、於二月二十四日（3月22日）行抵潁州東南之迴溜集」（『鎮圧』13、109頁）とあり、ここから船を利用して4月に六安州を経て廬州へ帰還した（和春奏、咸豊四年三月十八日、同書304頁）。張守常氏は帰還後の許宗揚が東王府の牢獄に入れられた点を踏まえ、彼が軍を返したのは南京の指示ではなく、大平天国内で北伐に反対した人々（秦日綱など後の反楊秀清派）の意志によるものだったと推測している（『大平天国北伐・西征史』188頁）。
- 119) 菊池秀明「太平天国における私的結合と地方武装集団」『歴史学研究』880号、2011年。
- 120) 張亮基奏、咸豊四年三月初三日『鎮圧』13、88頁。
- 121) 善祿奏、咸豊四年三月初四日『鎮圧』13、107頁。
- 122) 袁甲三奏、咸豊四年二月十一日『鎮圧』12、480頁。
- 123) 袁甲三奏、咸豊四年二月初七日『鎮圧』12、441頁。
- 124) 民国『夏邑県志』巻9、兵事（『捻軍』3、27頁）。
- 125) 張亮基奏、咸豊四年二月初十日『鎮圧』12、465頁。
- 126) 張亮基奏、咸豊四年二月二十六日『鎮圧』13、2頁。何家祺「書金郷知県楊君逸事」によると、楊鄭白は江西九江人で、援軍は同郷の將校に援軍の県内通過を黙認するように手紙を送らせた。だが楊鄭白はこれを拒否し、援軍は金郷県城を攻撃して楊鄭白を殺したという（『天根文鈔』『太平軍北伐資料選編』578頁）。
- 127) 張亮基奏、咸豊四年二月二十八日『鎮圧』13、16頁。また宗稷辰「巨野県新建昭忠祠碑記」によると知県朱運昌の率いる団練は1,300名の死者を出して敗北した（『躬恥齋文鈔』『太平軍北伐資料選編』581頁）。
- 128) 袁甲三奏、咸豊四年二月十一日『鎮圧』12、482頁。
- 129) 楊以増奏、咸豊四年二月十七日『鎮圧』12、482頁。また楊以増は援軍の黄河渡河後の二月二十日の上奏でも「意図分道直撲徐城」と報じて咸豊帝の叱責を受けている（同書577頁）。
- 130) 百勝等奏、咸豊四年二月二十五日『鎮圧』12、647頁。
- 131) 勝保奏、咸豊四年三月初三日『鎮圧』13、88頁。
- 132) 軍機大臣、咸豊四年二月十六日『鎮圧』12、523頁。
- 133) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月二十日『鎮圧』12、569頁。
- 134) 軍機大臣、咸豊四年二月二十二日・二十四日『鎮圧』12、585、632頁。
- 135) 袁甲三奏、咸豊四年二月二十日『鎮圧』12、573頁。
- 136) 楊以増奏、咸豊四年二月十七日『鎮圧』12、531頁。また李湘葵奏、咸豊四年三月初二日・三月十二日『鎮圧』13、81・208頁。
- 137) 軍機大臣、咸豊四年二月二十八日・三月初一日『鎮圧』13、12、13、57頁。
- 138) 張亮基の済南到着については張亮基奏、咸豊三年十月二十二日『鎮圧』10、626頁。また崇恩の武定移動については崇恩奏、咸豊三年十月十九日、同書590頁。
- 139) 張亮基奏、咸豊三年十一月十五日『鎮圧』11、217、216頁。
- 140) 張亮基奏、咸豊三年十月初九日『鎮圧』10、451頁。
- 141) 張亮基奏、咸豊三年十二月初八日『鎮圧』11、465頁。

- 142) 軍機大臣、咸豊三年十一月十九日『鎮圧』11、264頁。またこの日の上諭は張亮基に廬州で苦戦している江忠源に5-6万両を送るように命じている。
- 143) 張亮基奏、咸豊三年十一月二十四日『鎮圧』11、318頁。
- 144) 軍機大臣、咸豊三年十二月十四日『鎮圧』11、531頁。
- 145) 張亮基奏、咸豊三年十二月十八日『鎮圧』11、601頁。
- 146) 佚名『山東軍興紀略』巻1之中、粵匪二（『捻軍』4、12頁）。
- 147) 達論等『陽穀殉難事實』光緒三十四年刊、上海図書館蔵(427877)。また『太平軍北伐資料選編』589、598頁。
- 148) 善祿奏、咸豊四年二月三十日『鎮圧』13、47頁。
- 149) 達論等『陽穀殉難事實』。『太平軍北伐資料選編』592頁。
- 150) 張亮基奏、咸豊四年三月初九日『鎮圧』13、164頁。また民国『冠県志』によると、知県傅士珍は太平軍を「土寇」と取り違えた斥候の誤報によって抵抗を試みたが、城は半日余りで陥落した。この時「洪軍慣例、凡不納降、輒行屠殺、是以當時循屠城慘例、万頭紅巾、大呼開刀、逢人便殺、瞬時僵屍遍衢、血流成渠、慘号之声動天地」とあるように、太平軍は降伏しない者には徹底的な殺戮を行う作法を持っており、平陽や滄州と同じく虐殺を行った。死者は2,000人とも4,600人とも言われる（巻10、雜録志、紀変）。
- 151) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、84頁。
- 152) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『太平天国』5、179頁。
- 153) 崇恩奏、咸豊四年三月初四日『鎮圧』13、104頁。また臨清城内の兵力については勝保奏、咸豊四年三月初十日『鎮圧』13、173頁に「城内兵勇僅有二千」とある。
- 154) 善祿等奏、咸豊四年三月初五日『鎮圧』13、120頁。なお黄生才によると、北伐援軍でトンネル工事を行う「土宮官」は魯姓の指揮だったという（『山東近代史資料』1、13頁）。
- 155) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『太平天国』5、180頁。
- 156) 林紹年『張制軍年譜』『太平軍北伐資料選編』575頁。馬振文『粵匪陷臨清紀略』『太平天国』5、180頁。
- 157) 民国『臨清県志』大事記（『太平軍北伐資料選編』612頁）。
- 158) 勝保奏、咸豊四年三月初七日『鎮圧』13、142頁。
- 159) 勝保奏、咸豊四年三月初八日『鎮圧』13、152頁。
- 160) 張亮基奏、咸豊四年三月初五日『鎮圧』13、122頁。なお黄生才によると、彼は小南門、前八、前九の2軍は西関、右六軍は東門、後九軍は北門にそれぞれ駐屯した。また劉馬なる人物が率いる軍が南門に配置された（『山東近代史資料』1、13頁）。
- 161) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『太平天国』5、180頁。
- 162) 張集馨『道咸宦海見聞録』141頁。ちなみに恭鈺は兵勇と娼婦を争って殺されたが、勝保は彼を戦死と報じて褒美を求めた。張集馨は「冒濫の極み」とであると憤慨している。
- 163) 林紹年『張制軍年譜』『太平軍北伐資料選編』574頁。
- 164) 勝保奏、咸豊四年三月初十日『鎮圧』13、171頁。
- 165) 張亮基奏、咸豊四年三月十一日『鎮圧』13、193頁。
- 166) 勝保奏、咸豊四年三月初十日『鎮圧』13、176頁。
- 167) 諭内閣、咸豊四年三月十三日『鎮圧』13、225頁。この上諭で清朝は、張亮基が山東赴任に当たって後任の呉文鎔に充分な引き継ぎを行わず、西征軍の進撃を避けるように武昌を去ったこと、

山東の財政が逼迫していると報じて言い逃れの余地を確保し、援軍の臨清進攻にも迅速に対処せず、崇恩や善祿と協力しなかったことなどを罪状に挙げている。

- 168) 張集馨『道咸宦海見聞録』142頁。
- 169) 勝保奏、咸豊四年三月十五日『鎮圧』13、252頁。また勝保は三月初十日の上奏でも「挑派得力兵勇五百余名、由北門進城協守」と述べている（同書173頁）。
- 170) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『大平天国』5、181頁。この四川勇は4月11日に勝保が城内へ派遣したもので、「該勇等俱係曾在湖南守城、一切諳悉、可期得力」（『鎮圧』13、201頁）と期待されていた。彼らが話す四川官語は湖南、湖北出身の太平軍將兵と通じるため、北方の人々は彼らが内通していると疑問を抱いたと思われる。
- 171) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『大平天国』5、181頁。林紹年『張制軍年譜』『太平軍北伐資料選編』575頁。この戦いの日付について両者の記載は食い違うが、勝保の上奏には11日とある。なお勝保は「共計殺賊一千二、三百名」の大勝利と報じた（咸豊四年三月十五日『鎮圧』13、252頁）が、『張制軍年譜』は勝保が張亮基の功績を横取りしたと非難している。
- 172) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『大平天国』5、181頁。また林紹年『張制軍年譜』によると、この時張亮基の兵は勝保の陣地に攻撃をかけようとしたが、張亮基に諫められたという。
- 173) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『大平天国』5、181頁。当然ながら臨清陥落を報じた勝保の上奏はこの点にふれていない（同奏、咸豊四年三月十七日『鎮圧』13、280頁）。また1854年9月に礼科掌印給事中毛鴻賓は勝保を告発し、四川勇が「内外相応」したことを罪状の一つに挙げた（同奏、咸豊四年閏七月二十七日、中国第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』5、中華書局、1980年、213頁）。だが勝保は四川勇の首領だった把総龐玉ら多くがこの戦いで戦死したことを挙げ、「通賊之説、実不足信」と述べている（勝保親供、咸豊五年二月十五日、同書225頁）。
- 174) 崇恩奏、咸豊四年三月十九日『鎮圧』13、323頁。
- 175) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『大平天国』5、181頁。民国『臨清県志』大事記（『太平軍北伐資料選編』612頁）。
- 176) 諭内閣、咸豊四年三月十九日『鎮圧』13、316頁。
- 177) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月十五日『鎮圧』12、517頁。
- 178) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月十七日『鎮圧』12、534頁。
- 179) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月二十日『鎮圧』12、565頁。
- 180) 張集馨『道咸宦海見聞録』141頁。
- 181) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月二十日『鎮圧』12、565頁。
- 182) 僧格林沁等奏、咸豊四年三月二十一日『鎮圧』13、346頁。
- 183) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月二十日『鎮圧』12、565頁。
- 184) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月二十二日『鎮圧』12、593頁。
- 185) 軍機大臣、咸豊四年二月二十四日『鎮圧』12、632頁。
- 186) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月三十日『鎮圧』13、43頁。
- 187) 僧格林沁等奏、咸豊四年三月初四日『鎮圧』13、139頁。
- 188) 僧格林沁等奏、咸豊四年三月初四日『鎮圧』13、101頁。また勝保奏、咸豊四年三月初三日、同書89頁。
- 189) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月二十二日『鎮圧』12、593頁。
- 190) 張集馨『道咸宦海見聞録』145頁。また勝保は臨清から敗走した援軍陣地で「搜獲阜城逆匪来

信、囑令速往救応、並有渡黃催其後隊多帶火藥米糧之語」と上奏しており、彼らが救援要請をしていたことは間違いないと思われる（咸豊四年四月初四日『鎮庄』13、516頁）。

- 191) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、349頁。
- 192) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月三十日『鎮庄』13、45頁。
- 193) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、349頁。
- 194) 張集馨『道咸宦海見聞録』188頁。また石祥禎については張德堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下（『太平天国』3、55頁）。
- 195) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月三十日『鎮庄』13、45頁。また菊池秀明「太平天国の北伐前期における諸問題 南京から懷慶まで」。
- 196) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、85頁。なお同書には殺害された人数について「殺百姓大小男口十数万」とあるが誇大であろう。民国『臨清県志』大事記には「死難官紳五十六員、兵民八千七百三十一名、婦女七千六百四十一口」とあり、少なくとも1万6,000人以上が犠牲になったと思われる（『太平軍北伐資料選編』612頁）。
- 197) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、85頁。また黄生才供詞によると、彼は掠奪を止めさせるために「用東王、西王告示貼在城里」と述べており、これは安民の告示を指すと考えられる（『山東近代史資料』1、13頁）。
- 198) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『大平天国』5、181頁。また同様の記載は張集馨『道咸宦海見聞録』145頁にも見いだせる。
- 199) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、85頁。
- 200) 勝保奏、咸豊四年三月初十日『鎮庄』13、321頁。
- 201) 張集馨『道咸宦海見聞録』145頁。
- 202) 勝保奏、咸豊四年三月二十二日『鎮庄』13、371頁。
- 203) 張集馨『道咸宦海見聞録』145頁。この戦いについて張集馨は4月15日に幫辦軍務德勒克色楞の陣地の南側にある紅廟で発生したと記している。だが勝保はこの戦闘を4月16日、18日としたうえで、臨清州城の西側に作られた浮橋をめぐる攻防だったと記している（勝保奏、咸豊四年三月二十二日『鎮庄』13、369頁）。また張集馨はこの戦闘で太平軍陣内に火災が発生し、「賊自相踐踏、死者不可勝紀、被裹脅而乘機四散者、不下兩万人」と述べているが、これは18日夜から翌日にかけての温涼社の戦いを指すと見られる。勝保はこの戦いについて「南關賊營火藥簍失火燃燒、房舍焚燬極多、裹脅之衆經官兵擊散並乘亂逃出者不下三四千人」と述べている（同奏、咸豊四年三月二十二日、同書371頁）。
- 204) 黄生才供詞、『山東近代史資料』1、13頁。
- 205) 勝保奏、咸豊四年三月二十二日『鎮庄』13、374頁。
- 206) 馬振文『粵匪陷臨清紀略』『大平天国』5、182頁。
- 207) 勝保奏、咸豊四年三月二十六日『鎮庄』13、417頁。
- 208) 勝保奏、咸豊四年三月二十八日『鎮庄』13、452頁に「我兵馬隊除馬匹疲弱落後之外、能追及者不足千名」とある。
- 209) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、86頁。
- 210) 勝保奏、咸豊四年三月二十八日『鎮庄』13、452頁。
- 211) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、86頁。また清水集での援軍の被害について、勝保は「統計日夜殺賊二千余名、生擒二百餘名、擊散裹脅及投出者不下

- 二三千名」と述べている（咸豊四年三月二十九日『鎮圧』13、464頁）。
- 212) 勝保奏、咸豊四年四月初四日『鎮圧』13、516頁。
- 213) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、86頁。
- 214) 勝保等奏、咸豊四年四月初四日『鎮圧』13、516頁。
- 215) 民国『冠県志』巻9、芸文志、佚名「誥封武德騎尉蘭山營千総義亭馬君伝」（『太平軍北伐資料選編』609頁）。
- 216) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、86頁。
- 217) 黄生才供詞、『山東近代史資料』1、13頁。
- 218) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、86頁。
- 219) 勝保等奏、咸豊四年四月初九日『鎮圧』13、577頁。また同奏、咸豊四年四月十七日には濟寧州知州黄良楷、單県知県盧朝安および田在田の練勇が「四路搜殺潰匿村莊賊匪千有余名」したとある（『鎮圧』14、61頁）。
- 220) 勝保等奏、咸豊四年四月十一日『鎮圧』13、601頁。
- 221) 諭内閣、咸豊四年四月十四日『鎮圧』14、17頁。
- 222) 僧格林沁等奏、咸豊四年三月十六日『鎮圧』13、271頁。
- 223) 僧格林沁等奏、咸豊四年三月二十六日『鎮圧』13、414頁。
- 224) 僧格林沁等奏、咸豊四年四月初二日『鎮圧』13、487頁。
- 225) 李濱『中興別記』巻12（太平天国歴史博物館編『太平天国資料匯編』第2冊上、中華書局、1979年、210頁）。
- 226) 僧格林沁等奏、咸豊四年四月初七日『鎮圧』13、552頁。また同奏、咸豊四年四月二十七日によると、培成らは「是時西北風大作、官兵站立迎風、該逆搶上濠牆、拋擲噴筒、火罐、將帳房、火藥全行燃燒、遍地火燄、以致駝馬驚散」とあるように逆風のために北伐軍の攻撃を防ぎきれなかったという（『鎮圧』14、160頁）。
- 227) 僧格林沁等奏、咸豊四年四月十一日『鎮圧』13、599頁。
- 228) 僧格林沁等奏、咸豊四年二月二十日『鎮圧』12、565頁。
- 229) 僧格林沁等奏、咸豊四年四月二十六日『鎮圧』14、146頁。
- 230) 軍機大臣、咸豊四年四月初八日『鎮圧』13、559頁。
- 231) 僧格林沁等奏、咸豊四年四月十一日『鎮圧』13、599頁。
- 232) 僧格林沁等奏、咸豊四年四月二十日『鎮圧』14、82頁。
- 233) 僧格林沁等奏、咸豊四年四月二十六日『鎮圧』14、146頁。また勝保奏、咸豊四年四月二十日によると、この時勝保は桂明の陝甘兵2000名を河南、湖北戦線の救援に向かわせたため、連鎮へ向かった兵力は善禄の歩兵を併せて6000名であった（同書84頁）。
- 234) 僧格林沁等奏、咸豊四年四月十一日『鎮圧』13、599頁。またこの時期の北伐軍の兵数については同奏、咸豊四年四月二十日『鎮圧』14、82頁。
- 235) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、349頁。
- 236) 勝保奏、咸豊四年五月初一日『鎮圧』14、187頁。
- 237) 李開芳供詞、咸豊五年四月『清代檔案史料叢編』5、166頁。
- 238) 崇恩奏、咸豊四年五月初五日『鎮圧』14、256頁。
- 239) 勝保奏、咸豊四年五月初六日『鎮圧』14、263頁。
- 240) 李開芳供詞、咸豊五年四月『清代檔案史料叢編』5、166頁。

- 241) 菊池秀明「広東凌十八蜂起とその影響について」『金田から南京へ——太平天国初期史研究』汲古書院、2013年、167頁。
- 242) 菊池秀明「太平天国における私的結合と地方武装集団」『歴史学研究』880号、2011年。